

木材組織破壊の薬液の観察。
さらすことを調べる。(参考書)

紙料

粗悪紙製造との比較研究。

抄紙機の観察。(挿繪及び掛圖寫真)

各部の機能研究。

以上は研究用紙の相當欄に各記入させる。その他尙独自の研究になる點はこれを尊重し特に記述發表せしむる様にする。

第三時の過程

- 1 製紙の順序を各自分り易く記述する。
- 2 抄紙機による製紙系統を略圖する。
- 3 社會の進運と洋紙の使用を科學的經濟的兩方面より觀察發表せしむ。
洋紙の用途、和紙との比較。
なるべく廣範圍に概念を進める。

仕事。

4 古代、紙のなかりし時代を今日に比較想像せしめて整理する。

高等科第二學年

讀本 卷三 第二十二、會社

目的

經濟的營業教材として會社の組織、種類、業務經營等の内容を知らしむると同時に、文字語句の形式指導を行ひ以て工業都市としての環境整理をなし、勤務作業の精神を徹底せしむる方面も亦自ら勞作研究、生活經驗をなさしめんとす。

指導過程

- 一 全課扱ひの自由研究。
- 二 共働研究及び發表作業。
- 三 深究作業より會社設立の模擬生活。

第一過程

- 1 各自形式方面の研究を自由に行はず。
讀み得るまでに至る形式上の勞作。

此の仕事は相互研究、教師同行の共働的研究として進める。

然して第一次の朗讀生活をなすことにより直觀感想を發表させる。

2 次の印刷物により研究を一層高次のならしむ。(獨自學習、自己勞作を重んず)

資本を合同する 事業を經營する 會社の種類 社員の種類 株式 株主 株券 會社の役割の名前 株式募集 株の賣買 増資 配當 決算	讀	み	意	味	自分のものとして 使ふ

右につきその勞作研究の結果を發表し合つて確實なものとして本文に結合せしめ、又は他の語を加へて應用練習をなしてみる。

3 朗讀(論理的讀みの作業生活)
かくして口と手の技能的な要素を勞作の形によつて收得することが出来る。即ち目的々な自己學習の立場に極めて自然的に持ち込まなくてはならぬ。
更らに第二時よりよき自己作業を産み出すことになるのである。

第二過程

- 1 學習個性の分團により第一時の自由研究を持ちより研究の續行をなす。
- 2 此の間の仕事を、
質疑應答——兒童相互、兒童教師の共働。
- 3 朗讀——個讀、範讀。 4 問題の解決に入る。
- 5 各分類の大意把握。
兒童をして話させ、又は記述させ、その自由なる發表を重んず。
順次整理する。(板書利用)

- 6 具體的説話の形式により、歸納的扱ひをなす。
- 7 三度朗讀の生活を繰り返して一層論理的ならしめ、最後に默讀させて、仕事の反省を行はす。

第三過程

- 1 會社創立、株式募集、増資募集、決算等の實物廣告又は定款を提示する。そして次の項の説明を教材本文と結びてなす。

會社の位置。

資本金。

目的。

一株の金額。

募集株數。

第一回拂込金額。

發起人(七人以上)。

引受株數。

- 2 定款によるもの、中

庶務、設立年月日、存在期間、組織等の一通りの説明をなす。

- 3 會社設立の規定、模擬演出。

兒童を株主とする。

増資の場合。

利益配當。

逐次具體的な行動により作業學習としてその徹底を計る指導。

本教材を扱ふ一助として會社工場の見學を附隨させることにより一層社會的な生きた生命を與へることが出来る。

第二十一章 數學及び算術の本質

「數學は科學の父であり、更に算術は數學の父である。」といはれるのであるが、如何なる意味に於て算術が數學の父であり得るのであるか。若し果して算術が數學の基礎であるならば、我々が教科として取扱ふところの算術科の任務は實に重大でなければならぬ。

然り。算術は數學の父である。然らば如何なる意味に於て、かくいひ得るのであるか。我々は暫く兩者の本質が那邊に存するかを考察することによつてそれを明かにしたいと思ふ。

第一節 數學の本質

ピタゴラスの名や、ニール河の氾濫が幾何學を生んだ如きはあまりにも有名なことである。まこと數學の發生は既に遠く過ぎ去つた時代であつた。數の起原も人類の祖先が敵と戦ふ爲に、彼我の人數を數へたり、物々交換をする時に之を數へたりしたことに基くといふことであるが、西紀前二

千年代頃商業上の必要から既にその發達を見たことは、記録に徴して明なことである。

實に數學はかくも古き過去を有するのであるが、それが長い年月を通じて研究が進められ、その結果體系づけられたものが、今日の所謂形式科學としての數學である。我々は數學の本質が那邊にあるかを、その對象と方法との上に考察の眼を向けなければならぬ。

一 數學の對象

最も狭い意味に於ける數學の對象は數であらう。然しながら、古來幾何學をも數學の一部と認め、以上、數學は單に「數」を對象とするものであるとはいひ難い。そこで「數學とは、數及び形の間存する關係を精密に論定する形式科學である。」と考へる。然らば近世に於て發展したる、射影幾何學の如く量に關係なきものは如何に考ふべきであらうか。又かの理論代數學の如く記號に數以外のものを表させるものは如何のみならず近代に於ては、數や空間より一層抽象的な集合及び群を對象する集合論や群論、即ち數と量とかに、無關心に唯手續だけを對象とするもの、建設を見た。そして之等全數學の基礎部門であると認めらるゝに至つて、今まで考へられて來た數學の定義は尙一層その範圍を擴張せられなければならなくなつた。こゝに於てか、「數學とは一般に思惟の對象としての物と實質を度外視し、單に抽象的な要素の結合排列の形式的關係を對象とするものであ

る。」と見らるゝことが最も妥當とされるに至つたのである。

これ即ち研究對象より考察して、數學はかの個々の事實に出發し、進んで事實間に存する一般妥當の法則を求めんとする實質科學 (Material Science) に對して、形式科學 (Formal Science) と稱さるゝ所以でなければならぬ。

二 數學に於ける方法

數學は抽象的な要素の結合排列の形式的關係を對象するのであるが、この爲に我々は現實の經驗より抽象歸納して之を認識しようとするものでない。この方法は即ち實質科學の目的とする所であり、形式科學たる數學は個々の事實を度外視し、思惟の先驗的原理に依憑して、若干の公理體系から必然的結論を演繹する科學である。而して公理の體系は只互に矛盾せざることを標準として設定せられたるものであつて、それが果して如何なる事實經驗に立脚するかを問はない。即ち「我々が何を語りつゝあるかを決して知ることなく、又我々の語る所が果して眞なりや否や」をも知ることがないのである。従つて數學に於ける認識はあくまでも先驗的であるが故に、方法上からの經驗科學に對し、先驗科學 (Transcendental science) と呼ばるゝ所以でなければならぬ。

數學は先驗的科學であり、従つてある一つの公理から必然的結論を抽出す科學であるが、故に

最も論理の重ぜられるものでなければならぬ。さればこそ古來數學の研究は哲人の踏まねばならぬ必須段階であつた。否數學に勝れたる學徒は必ずよき哲人であることが常であつた。

之を要するに、自然科学の對象は吾人の經驗界であるが、數學は思惟の世界を對象とする形式科學であり、常に先驗的な思惟に依憑して若干の公理體系から必然的結論を演繹する先驗的科學である。

然しながら之は現今體系づけられてゐる數學そのものを對象として論理的に考察を進めたのであるが、我々は更に過去數千年間に數學は如何に發達して來たのであるかを發生的に考察することによつて、我々の教育材料としての算術そのものゝ本質を明にする爲の一助にしたいと思ふ。

前述せるが如く、數の起原も先人が戰場に於て、將又物々交換に於ての必要にあつたといふ。また西紀前二千年に於て既に早く算術を生んだのも商業上の必要であり、幾何學の發生もニイル河氾濫に伴ふ地域不明解決の必要にあつたとするならば、數學の發生は日常經驗の必要感に基因するも稍進んでは日常生活の必要といふよりも、寧ろ自然を正確に認識せんとする要求が數學の發生發展を促したのであるが、更に近世に至つては經濟學といはず、心理學といはず、哲學に於てすら數學的方法が用ひられたのである。

かくして社會百般の事象中に數學と同等の論理形式を見出さんとの希求が盛になり、益々數學の發生發展の動機を高むるに至つたのである。

論理的に考察したる數學は我々の經驗や自然社會の事象とは何等關係のない抽象的形式的なものであるが、發生的には之と全然反するのである。學としては形式科學として演繹的方法にのみよるのであるが、數學が實質科學としての自然科学と相俟つて發展し、両者が密接なる關係あるを以て直ちに數學を自然科学の一に數ふるものあるは、發生的見地を以て直ちに學の本質を設定せんとする早計に過ぎない。それは兎に角として、純粹數學は抽象的關係を論ずる形式科學であるにしても、その過程に於ては單に演繹的方法のみならず、直觀的方法や實驗的方法が多く採用せられたものであつて、論理的には直觀を排除しつゝも心理的、發生的には猶直觀が裏付けし出發點をなしてゐるのである。

げに數學も亦、證明は論理によるものであらうが、發見は常に直觀によるものでなければならぬ。

第二節 數學的觀念

前述せるが如く、數學の本質はその抽象的にして形式科學たるの點に存し、その方法に於ても亦具體、直觀を排し先驗的なる基礎に立ち論理的推論をなすところにあるのである。

がしかし、算術はこの數學の本質をその精神とはするものゝ、決して純粹數學そのものではない。我々が算術の本質を理解する爲には、數學の論理的考察に教へられるよりも、より多くその發生的考察に負ふ所が大であらう。

何故なれば、算術は生活や經驗や直觀の世界に立脚して數量的經驗を得る唯一の教材であり、従つてその方法も當然歸納的結合主義のものであつて、決してかの純粹數學のその如く、抽象的形式的な思惟を對象として行はれる先驗的科學でないからである。

つまり算術は、生活經驗の必要感によつて發生發展せしめられたる數學そのものに學び、常に具體と直觀に基き數量的經驗を得ると同時に、それによつて生活の數量的所理解決をその本質とするものである。

かく算術が生活や經驗や直觀の世界にあつて豊富な資料を提供するが故に、算術はあらゆる數學の基礎であり、之の門戸を通らずに他の世界に入ることが出來得ないであらう。

實に、數へることから計算は生れ、測定は發達し、空間の性質研究となつて幾何學は發達し、計

算することから代數は生れ、更にそれ等から數學の方面が開拓されるのである。かくして、我々が最初に述べたように、「算術は數學の父である。」のである。

更に算術は數學の應用である。算術の起源が實際生活の必要から生れた以來、この目的を持つてゐるのであつて、如何なるものも數量的の所置をしようとするれば算術の助をからなければならぬ。

前にも屢々いふた様に、算術は數學の應用である限りに於て、その本質を精神とすべきではあるが、徒に理論に走ることなく、ペリーの所謂「我々は時計の構造を知らなくてもそれを使ひ得る人」といふ様な意味で、代數にまれ、幾何にまれ、三角乃至は高等數學でもグラフでも、方程式でも測量でも導入すべきである。

第二十二章 算術教育の目的

我々の考へる限りに於て、教育の目的は生活の指導であり、従つて算術教育の目的は數量生活の指導でなければならぬことは當然の歸結であるであらう。

この故に、我々の算術教育は單に傳習的知識獲得を以て足れりとするものではない、常に現在の生活、文化の理解、よりよき生活創造がその眼目でなければならぬ。

既に算術の本質に於て、明にせるが如く、算術は純粹數學ではなく、具體と直觀の基礎に立つて數量的經驗を得るものである限り、我々の算術教育はこれによつて彼等の數的生活の深化擴充を圖ることが目的でなければならぬ。即ち、兒童の生活環境に無數に存在する數學的課題を解決せしむることによつて、彼等の數量的生活は益々深化され擴充され遂に我々の算術教育の目的は達せられるのであるが、然らばこの數學的課題を解決する根柢は何であらうか。我々の見る所によれば、數學的觀念、數學的知識、數學的能力、並に社會文化の諸常識等であらうと思ふ。然らば我々算術

教育の直接の目的は之等の觀念や能力を涵養することではなければならない。

一 數學的能力

數學的能力とは、計算力、實測力、思考力の三項を意味する。尤も思考力是要旨にも明なるが如く算術全體に通ずるものでなければならぬのであるが、便宜上之を數學的能力の中に包括せしめ思考力が數量的課題を解決する上に如何に重要であるかは今更言を俟たぬ所であらう。數學そのものゝ本質上、思考力——それが抽象的課題であればある程必要であるはいふまでもない。この故に思考陶冶の學科として算術は既に早く小學校教育上重位を占めたのであつた。

又計算なくして數學的課題を解くといふことは不可能なことであり、従つて之に習熟せしむることとは頗る重要なことでなければならぬ。實に數學に於ける思考といひ總べての事が計算と相即の立場にあるのである。

我々の數學教育は、數學の發生的立場を持つ限り、具體的な空間事象として起る疑問に出發せねばならぬ。否我々の日常生活には具體的な形象に關する疑問、課題が多い。之が解決力は實に實驗實測力に俟たなければならぬ。かくして實驗實測といふことは單に實用の爲とか。又數量的の觀念を養ふといふ目的ばかりでなく、具體的の經驗を十分に於て聽てある種の知識を建設する時の基

礎となるのである。

二 數學的觀念

數學的觀念とは數、空間及び函數や諸觀念を指すのである。數學とは數及び空間とそれ等の關係を對象とするものである限り、之等についての基礎的觀念を缺いては數學的課題を解決することは到底望まれないことである。然しながら之等の觀念もかの純粹數學のその如く、抽象的要素の形式的關係を對象とすることによつて得られるのでなく、具體的なる數及び空間についての具體的關係を考察吟味することによつて、直觀的に得せしむべきである。されど兒童の經驗を積むに従ひ遂には抽象的體系としての知識の收得は望ましいことである。

三 計算知識

計算式の特種な規約に對する確實な知識を與ふことは、數觀念を與ふると同様必要なことなればならぬ。計算不能の兒童の中には全然計算能力に缺けたるもの及び思考能力の低級なるものもあるであらうが、この計算の諸規約に對する不確實に據るものゝ多いことは經驗上の事實である。而してこの計算知識は計算力の中に含ましめても、又數的常識と見做してもよいのではあらうが、我々が特に茲に抽出する所以のものは、數觀念と數學との關係に於けるが如き意味に於て

である。

四 社會文化の諸常識

我々の算術教育に於ける直接目的として、社會文化の諸常識の獲得といふことも重要な地位を持つ。

何故なれば、我々の算術教育の目的は數學的觀念、計算知識の養成と數學的能力との鍊磨によつて、數學的課題を處理し、以て數量的生活の擴充深化を圖るものである。之等の課題は常に具體的な社會現象の中に横はるものである。金錢にせよ。時にせよその他あらゆるものは日常生活の事實である限り、之等の日常必須なる諸常識を涵養するといふことは當然の歸結でなければならぬ。

第二十三章 算術問題の要素

第一節 要素の決定

算術問題の要素を一應吟味することは算術の作業學習を考へる上に必要なことである。この要素は前述したる算術教育の目的から當然決定せらるべきことである。即ち算術教育は數學的課題を解決することによつて、兒童の數的生活の擴充と深化を圖るのが目的であり、これが根柢をなすものは、數學的能力、數學的觀念並に社會文化の數的諸常識等である。かるが故に數學的課題解決の一般態度については勿論のこと、それがための作業的學習はこれ等を要素とする各方面に向つてなすべきである。

今次ぎに算術問題要素を表示すれば、

1 數學的觀念

數量觀念

空間觀念

函數觀念

計算知識

2 數學的能力

計算能力

實驗實測力

思考力

3 社會文化の數的諸常識

4 學習態度

第二節 數學的觀念

小學校に於ける教材としての數は、大體整数、小數、分數、諸等數、並に零、負數等である。この數は數量と事實とを伴つて居る。この數量と事實とが數學的觀で念あつて、この觀念を教養するには、數量と事實とを計算によつて明瞭にし確實にし完全にすることが第一の方法である。

第三節 數學的能力

數學的能力即ち計算能力、實驗實測力、思考力は計算に習熟せしめること、具體的なる行動によつて、當然の結果として形式は陶冶せられ、思考力は練られることになるものである。

第四節 社會文化の數的諸常識

日常生活上の數的諸常識を涵養することは重要な一部面であるが、かゝる事實は吾々の身邊を圍繞してゐる事實を題材として教授し、整理し、系統づけて行くところに養はれるものである。

第五節 學習態度

吾々の數學的教育的歸するところ兒童をして數生活に對して興味を持たせ、進んで己が環境を數學的に考察し解決して行かうとする態度にまで導くことである。即ち吾々を取巻く自然、社會、それ等の中に充滿する數學的課題、それに向つて自發的に解決せんとする態度を得しめる。この意味に於ける態度培養に心懸けなければならぬ。尙ほ狹義には與へられた問題を解く際に於ける兒童の態度の養成にも心せねばならぬのである。

以上の如くに算術問題の内含する要素について考へる時吾々は、この算術問題學習に於て作業的方法によることが、學習の目的を達せしめる良い方法であることを理解せしめるのである。

第二十四章 算術學習の過程

算術學習にあつて如何なる段階乃至過程を経るものであるかといふことを一應吟味して見ることは算術を作業によつて解決して行く過程を明瞭にする順序として必要なことである。

第一節 課題の場合の過程

第一項 演繹的方法

この演繹的方法といふのは、思考活動に於ける演繹法を適用する學習法のことである。この演繹法は形式論理から言へば、歸納法との間に劃然たる區別があるのであるが、機能的發生的に見れば兩者は判然と區別することゝては不可能である。即ち形式論理から見れば演繹法は一般より特殊に到達する過程であるが、これを算術等の問題を解釋する作用として見るときは、この形式論理とは反對に、個々の事物に直接面接して問題を惹起するものであるから、歸納法の如き過程とも見られ

ないことはない。即ち個別、特殊の問題に出發してこれを解決するに役立つが如き概念を發見することであるから、この概念理法は歸納法に依らねばならぬから結局は相關的の位置にあるものであることが知られる。

しかし課題の場合に歸納法的方法と分離して見れば、自己の問題としてゐる個物を他の概念又は法則に關係せしめることによつて、一般より特殊へ移してこれを解釋するところの思考形式であるかく心理的に考へるならば、一般的な概念法則は所與の物ではなくて個物から出發する、そしてその過程に於ては主として個物解釋に既に得てゐる一般概念を見出さうとの努力であることになるので形式論理の定義と反對に立つことになる。要するに形式論理に於ては發生的なる心意努力を無視して既に發見したる一般概念をだけ眺めて靜的な立場から一般から個別にとの公式を立てたのである。

第二項 演繹的學習法の過程

演繹的方法による學習過程は如何にあるか、即ち演繹法が個物に出發し、個物を解釋すべき原理を求めて、之に適用せしめる思惟の活動過程であるから次ぎの様な形式過程である。

- 1 與件の分析
- 2 原理の再生

- 3 原理の適用
- 4 檢證

與件の分析とは與件を要素に分解し、その要素の中に内在する原理を見出さうとするの働きである。問題を分析して數と數との關係を見て數關係の偶然性をすて、主要なものに分析するのである。

原理の再生は既得の原理を経験内容から再生すること、前述したる個々の與件を前提としてこの與件に關聯する原理の再生の行はれる過程である。

原理の適用は分析した與件と再生したる原理とを關係づけることであつて、要するに原理を個々の事件に適用して問題解決をすることであり、推理の作用としての演算によつて斷案たる答に到達する過程である。

檢證は獲得した原理を確認することによつて信を伴はしめることである。即ち實生活への適用などがそれである。

第三項 算術課題の場合

- 1 疑問
- 2 判斷
- 3 推理(演算)
- 4 檢證(演習)

課題せられてこれを解かんとする内部的要求即ち動機が発生する。内部的要求とは課題せられたる時これを解かんとする内部的要求を發生する。内部的要求を動かすものは疑問である。即ち疑問に即してこれを解かんとする内部的要求の發生即ち動機の發生となるのである。

この疑問を解決し目的を實現すべき努力を導いてくる。その努力とは判断と推理とである。判断と推理とによつて目的を實現するのである。次ぎには判断推理の成果に對して檢證することが必要である。判断、推理は課題せられたる問題を解釋する思考活動の中心をなす活動である。この活動の現はれとして演算があり、檢證の過程として演習がある。

疑問とは解釋に對する疑問であつて、あれかこれかと想像したりして題意を把握したりする心身の全活動である。

判断は與へられた事實と事實との關係から如何なる計算をなせば解決し得るかをきめる。

心の働きである推理は解決し得る心の働きに續いて判断したる計算を推理によつて解決するもので、加減乗除等の計算をするか、又は方眼紙を用ひてグラフを描くか等しく演算、實測、觀察等によつて新らしい數を發見することである。

檢證は演算の結果によつて出來た新らしい數を再び問題に與へられた事實に参照して適當なる意

味づけをすることであつて、實生活への指導であることになる。

第二節 自由研究の場合の過程

第一項 歸納的方法

歸納的方法と演繹的方法とは思惟作用としての形式論理上からは區別があるが、思惟活動の全なる活動として見た時は相關的の思惟過程に過ぎないといふことを明瞭にした。

歸納的方法是形式論理の上から見れば、個々特殊より一般概念に到達する過程であるが、これを發生的心理的な立場から見れば、むしろ問題とする處の概念、法則から出發するものである。そして個々特殊の分析によつてこれを適用して見てから概念を確立するところの心理過程である。前者の形式論理に立つ見方は靜的な分析であり、後者の心理的機能的立場の見方は動的な分析である。

第二項 歸納的學習法の過程

この學習は或る問題に直面したる時に疑惑として又は問題として動的過程を惹起することに始まる。そして次ぎの様な學習の過程をとるものである。即ち

1 解決の暗示

2 推理による發展

2 概念の構成

解決の暗示とは問題解決の方向に接觸し交渉する様に、學習の過程に於て適當な暗示をすることである。即ち問題を解決するために見當をつけしめる仕事であるから解答に關する鍵を想定し發見せしめることである。

推理による發展とは問題解決の方向を發見し想定したならば、それから眞の推理をなす努力の過程である。この過程に於ては(一)材料の蒐集と(二)實驗觀察とに依るのである。材料の蒐集は重要な要素であつて、先づ自己の記憶に訴へて觀念表象概念を湧起して理論必然の法則に従つて關聯活動を営ましめる。次ぎには概念法則發見のために實驗觀察を行ふべきである。尙ほこの材料蒐集の方法となさるべきことは講義聽講、參考書研究、教師の指導等があるが、前述したる論理必然の聯關を營む過去の心的内容と、これを發展せしめる觀察實驗とが中心方法過程である。

この中心たる實驗觀察は重大なる意義を有するもので、問題の建設と問題の解決のためには極めて大切な手段である。觀察は事實を自然的生起のまゝにその状態、性質、變化等を認知することであり、事物の比較研究、歴史的考察、統計的研究等によるのである。實驗は人工的加工によつて適當な早さで、所要の時に發生せしめ、反復し得るものであつて、觀察の制限せられたものである。

といふことが出来る。かく實驗觀察によつて要素に分析して、因果の關係を認定することである。

概念の構成とは最初に把えた知的想像性即ち假説とも云ふべき性質が、實證的なる性質に進むことである。かくて原理として又は法則として確認されるには、そこに正しきや否や、又は適用し得るや否やの檢證が行はるべきであらう。こゝに生活との關聯を考へることになるのである。この生活との關聯を考へることは次の項に述べる自由研究の過程としての練成の仕事に當たるのである。

第三項 自由研究の場合

1 問題構成

2 解法發見

3 法則、公式發見(演算)

4 練成(演習)

問題構成は數生活を生活せしめる事實の中から生れるものであつて、即ち數生活の中に問題が發生し、問題を構成するのである。課題の場合に於ける疑問の心の働きがこの課程にあたる。

解法發見は丁度判斷の心の働き過程に合致してゐるもので、如何なる計算をなせば解決し得るかを發見する心の働きである。

法則又は公式の發見は、前過程に於て計算による解決を發見したる以上は、それについて要求しつゝある法則、公式を發見することである。勿論演習を伴ふべきことは云ふまでもないことであ

る。

次に公式なり、法則なりを發見したる以上、その公式なり法則なりを生活事實に参照して適當なる意味づけ、實生活への指導をなすことが練成である。

以上述べた課題の場合と自由研究の場合との過程を比較して見る時、心の働き方面から見れば全一なる作用活動であつて、對應してゐるものである。かく對應してゐて、補合的相關的の思惟活動をなしてゐる。これ作用の方から或は發生の方から考へて居るために相關的の過程をなしてゐるものと見られるのであつて、若しこれを思惟作用の成果たるところの形式論理の上から考へるならばそれは明らかなる區別をなしてゐるのである。即ち第一節の場合たる課題の場合は演繹的なる形式をとつてゐる流であり、第二節の場合たる自由研究の場合は歸納的なる形式をとつてゐる流である。

第二十五章 算術の作業解決

第一節 作業による過程

算術は數學的課題を解決することによつて兒童の數的生活の擴充と深化をはかるのであるといつた。その數學的課題を解決するとは生活、經驗、直觀の世界に立つて數量的經驗を得ることである。即ち兒童は數量的經驗を得ようと努める。教師はかゝる經驗を即ち事實の經驗、解決の指導をするのである。

以上の如く算術學習指導を考へる時は、算術學習といふことは算術を直觀の世界に立つて解決すること、算術の直觀即ち經驗、生活を通して解決することになる。かく經驗生活を通して解決するとはそれは作業を通じて解決することである。

それならば算術作業とは何であるか、第一に前述したところの課題の場合及び自由研究の場合何れの場合に於ても各その全過程をふましめることであり、それが一つの過程でも省略せられなく

てはならぬのである。第二には例へ他の段階は輕視せられることがあつたとしても最後の檢證練成の過程は重視しなくてはならないことである。即ちこれ實生活への指導である過程であるからである。

第三には第一と關係することであつて、即ち歸納演繹兩方法が何れも暗示に出發してこれが解決のために實驗觀察をなし、そして因果の範疇に適用して解釋も系統的に組織せんとしてゐることからして實驗觀察が中心となる過程であることになる。

第二節 歸納的思考活動と自力的學習様式

算術はその本質的關係からして精神的作業の學科であるから、彼のケルシエンシュタイナーの唱へるが如くに、學習生産の原則によつて、兒童自ら算法とか數理とかの發見、創造せしめる過程をとることが本體であらうと思ふ。かく發見、創造の過程とは自力によつて學習を進行して行く心の働きによつて學習せしめるのである。即ち一を知つて二を知り、二より三にと進める生活體驗の方法たる歸納的方法を主とした學習であらねばならぬ。

算術學習は算術を與へんとする指導であつてはならぬ。宜しく自らなる力でもつて得させやうと

せねばならぬ。即ち自己の力によつて、産み出さんとし、自ら發見し自ら練習し發表する方法過程をとらねばならぬのである。

然るに一を生活體驗して居らない兒童に、所謂算術を授けやうとして、二、三を強いるなどは誤つてゐる。歸納的なる思考活動による自力的學習様式によることが主となつて、この方法に相關する演繹的なる思考活動をも考へながら指導して行かねばならぬことになる。

かく云ふも要するところ根本の考へは數的なる自己生産といふことになるのである。

第三節 實際化

算術の作業的解決に於ける着眼として今一つ注意すべきは、算術教育の實際化の問題である。實際化といふのは實質的内容は地方的郷土的基礎の上にとること、形式的陶冶の上よりは計算の迅速確實であることである。

即ち兒童生活を横とし、算術系統を縦なる基礎として、教材は商工業都市、農蠶部落の實際經營から取材する。然かも材料の範圍は多きに過ぎず、少なき材料を多方的に大いに練習せしめるといふことである。かくて實質的にも形式的にも生きたる算術たらしめるのである。

第二十六章 算術學習指導例

尋常科第一學年

教材 數量遊戲學習、飛石わたり、

教科書聯絡、十二頁以下の扱ひ。

目的 自然的遊戲期の生活は唯無目的な活動であり、漠然體驗の本能活動である。故に極めて自然的にその生活に學習を配し、興味中心の三昧境によりて、自ら數量に對する小さな芽萌えを培ひ行かんとす。矢張り具體活動にあらざれば承知出來ぬ彼等には行動を伴はせなければならぬ。そこに即ち作業化への方向と色彩を持つことゝなるのである。

遊戲方法

- 一 全級兒を五六人宛に組分けします。
- 二 各組から審番一人宛を出します。
- 三 各組へ飛石（厚紙で造つた小黑板、十センチに二十センチ位の矩形）に次の様な數量を記

入して渡し配當せしむ。

- 四 渡りながら計算し、答を自分の持つ石盤へ記入しては次々と渡り行き向ふ岸の審番へ見せます。

- 五 審番は豫め計算して答を知つてゐるから出來てゐる者には「渡り」といつて自分の組の記をつけてやる。

違つた者には「ドブン」といつて渡り直させる。

- 六 「渡り」の記を貰つた者は又別の組へ加入してそれを渡る。順次全組を渡る。

- 七 「ドブン」の者は再び計算し直し乍ら渡りなほす。

- 八 審番は時々交代させる。

- 九 同じ組で幾度も「ドブン」した者は適宜に見計つて他の組へ廻してやる。

- 一〇 全部の組から「渡り」の記を貰つた者の勝ちとする。

或る一組の例

審番

$$\boxed{5+8}$$

$$\boxed{4+9}$$

$$\boxed{3+7}$$

$$\boxed{2+8}$$

渡る者

○ ○ ○ ○

備考

- 一、指導者も一緒に渡り歩き乍ら個人指導を行ふ。
- 二、飛石に記入の數量は具體物を表現したものでよし。尙程度は自由に更へる事が出来るから繼續的發展的な遊びの指導に可能である。
- 三、自分の仕事を忙しくさせて置けば他人の答によつて渡る様なこともない。此の邊の遊びの訓練も忘れてはならぬことである。
- 四、川とでも池とでも假想させて、室内又は庭何れにても實施することが出来る。
- 五、興味を中心は審判の言ひ渡しにある。
- 六、學習の中心はその言ひ渡しに對しての反省にある。次の努力を自ら誘發する。

尋常科第二學年

教材 掛算九九の總練習。

教科書三二頁より四九頁までの材料を中心として五〇頁より五五頁までの材料を加味し、復習(2)にも關聯す。

目的 掛算九九の應用練習を遊戲的作業氣分にて實施徹底せしむ。

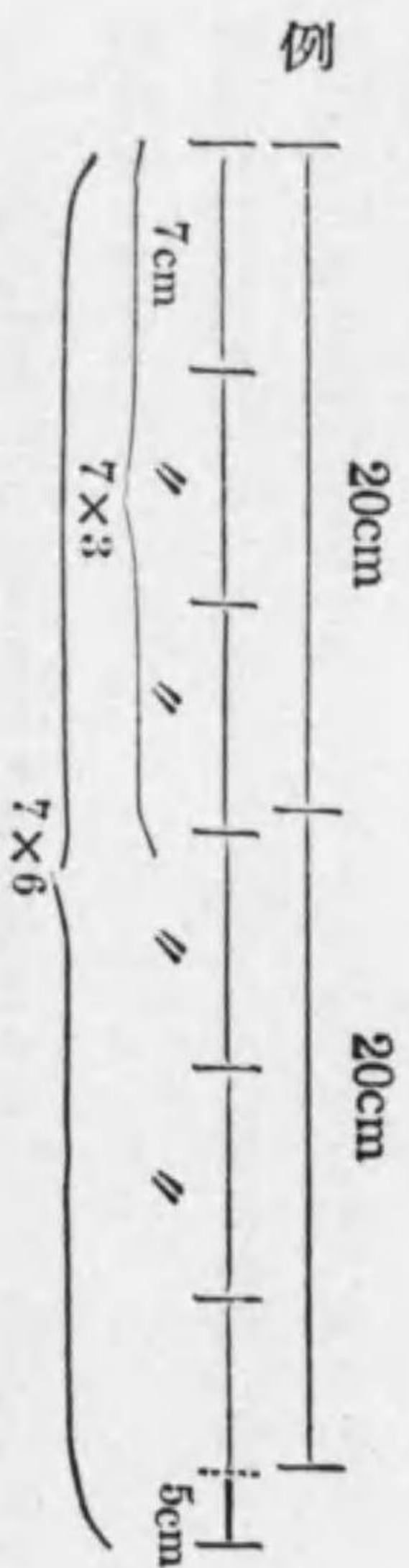
準備 50cm 物差十本、

1m 物差二十本、

計算用繩棒、30cm 20cm 15cm 9cm 8cm 7cm 等澤山、

學習過程

- 1 九九練習板(板に縦横各九つづゝ八十一の空あるもの)によりて一通りの九九練習をなさしむ。
 - 2 二人宛出して九九の競争遊戲。
 - 3 正三角、正四角、正六角形等を渡して一邊の長さを計り、周圍の全長を言はしむ。この間九九の應用に引き込む。なるべく自發的勞作の遊戲に指導する。
 - 4 正三角二つを◇、▽△の如くしてその周を計る遊び(同様九九の應用にて課す。)
 - 5 繩棒の遊び。
- 加減より九九の應用へ進める。



此等の如く實際に机上又は床上に並べさせてはその數量觀念を九九に結合しては確實なものにして行く。

教師もこの遊戯三昧の境地に一緒に這入りこみて共働的指導をせなければならぬ。

6 何倍といふ言葉と實際を結合することにより口と手との遊戯生活が出来上るものとする。

備考

- 一、決して無理な技巧や巧利的打算の念を以て彼等の無心な遊戯場を傷つけてはならない。
- 二、本當に遊ばせるだけの度量をもつて指導せなければならぬ。
- 三、この生活中に彼等の發見を明瞭に見出すだけの餘裕を持たなければならぬ。
- 四、連續發展し、何時か或る目的に向つて働くのだといふ發見に迄進めて始めて完全されるのであることを忘れてはならない。

尋常科第四學年

教材 目方

目的 實驗實測によつて、目方の單位關係を會得せしめ、而して目方に關する問題の構成並びに解決を發見的に行はしめ以て實生活との交渉を計り、實用的方面の數量觀念を擴充伸展せ

しむるに在り。

準備 天秤、桿秤、台秤等種々生活に直接交渉ある品物。

學習過程

一 目方の作業的取扱ひ。

目の單位關係を知らしむ。

各種秤の名稱及び使用法を一通り知らしむ。

實驗實測作業に入る。

此の間自作問題の構成を行はせる。

劣生は教師を中心に働かしめ、その發見を促す様に指導する。

二 事實問題の取扱ひ。

兒童各自が自由作業にて構成せる問題につきて自ら解決の方に進むべく働かす即ち算法の發見、數理の發見、創造、これ等は本當に自らの勞作によりて生産された尊いものである故に、

三 學級全體に向つて發表し、共働的吟味批評の生活を経て解決に進め、量的生活を一層感銘

強いものにせなければならぬ。

教科書中の問題に結合し、

教師より提出の補充問題に連絡し、

然して歸納的に數關係を了得せしめなければならぬ。

備考

- 一、澤山ながらも種類の異つた問題に多く接せしめること。
- 二、日常卑近な實物をもつて向はせること。
- 三、環境物一切を衡的表示を以て充たし以て徹底をはからなければならぬ。

尋常科第六學年

教材 公債株式。

目的 公債株式に關しては兒童は誠に何等の知識を持たぬ。おぼろげなる概念さへ與へられて居らぬ故に模擬的體驗の作業的共働扱ひにより、環境整理より文化財を内容とする數生活の充實深化を計りてその徹底を計らんとす。

學習過程

第一時

會社工場の見學より得た彼等の既知事項を整理してみる。

然して實生活との交渉方面を明かにする。

會社の必要を發見せしむ。

具體的に日本鋼管、淺野セメント、東京電氣等の説明をなす。

會社設立の背景の假説を立てる。

近時セメントの需要特に増加し、爲めにセメント製造は益々有利確實なるものである。此れを想定する。

1 計劃

兒童、教師合同にて七名の發起人を定む。

早速發起人相談會を開く。

事業有望——資本金の必要——株式募集。

資本金 五〇〇萬圓、株數一〇萬株、五〇圓株。

額面高、第一回拂込金等も決定。

會社設立の趣意書も出來上る。

實物募集廣告等提示。

2 株式募集。

株券の發行（株券見本提示によつて造る仕事をなす。）

3 應募車役の決定、資金の運用、社員、職工の採用等總べて全兒童の分擔を以て行ふ。

4 株式賣買の數量生活と問題構成。

此處迄に至る問題は已に容易に構成することが出来る。

第二時

一 決算——重役會議——株主總會（配當率、配當金の決定）

配當率が決定されて各自の持株に對する配當金の計算が出来る。（教科書中の問題に關聯する。）

二 増資の爲めの公債募集、二五〇萬圓、

1 八分の公債募集

何れが會社には有利なるや
残の株式拂込み

2 二五圓拂込の同株時價が六〇圓なれば株を賣りて公債を買ふ方が有利か。

獨自研究により意見發表及び問題構成をなさしむ。

そこで利廻の了得をなすことを得。

第三時

新聞紙上に現はされた國債、公債、社債、株式の賣買相場利廻、其他郷土に於ける直接彼等が關係ある諸會社の株式及び社債を相互學習と指導的共働勞作によりて種々なる發見發表を行ひ以て彼等の生活内容の向上を計る。

此の間又教科書中の問題及びこれ等に關しての自作問題等に就きての實際的學習作業が行はれることとする。

第四時

自由發展的勞作學習。

一、獨自學習により教科書及び補充問題の研究相談を相互的共働的に行はしむ。

二、事實の創作を重視する。

三、此の間自ら公式理論に歸納して行く。

第五時

基本的學習の徹底。

- 一、テストに基本問題を提供する。
- 二、テストの結果に依り生活の整理を行ふ。

兒童の誤解點及不徹底なる點の問題につき再體驗を行ふ。

再び相互研究の作業。

個人的指導。

練習問題の課題。

備考

以上の作業は公債株式の教材十時間位に配當してその徹底を期する様にする。

第二十七章 地理科の本質

國民教育上の見地によつて組織せられ系統立てられたところの地理科は歴史科と共に所謂総合的體驗生活を営ましむべき使命を有する國民教科の一つである。即ち歴史が時間的に自己の生活を歴史的、國民的に了解せしめんとするに對して、地理は自己の生活を空間的に國家社會の活動と結合し國家社會の活動を世界發展に結合して了解せしめんとするものである。

かくの如く觀じ來るときは教科としての地理もその本質に於ては何等地理學そのものと異るところはないのである。

元來地理學は土地と人生との關係を科學的に考究するものである。

故に其の範圍は頗る廣汎でありその調査事項は極めて複雑多岐であるが、今これを大別して土地即ち吾人の活動場に關するものと、人生即ち吾人の活動そのものに關するものとの二つとすることが出来る。而して前者は即ち自然地理であり、後者は即ち人文地理である。

既に人と自然との關係を考究する以上幾多之等に關する他の科學の貢獻をまたねばならない。

今その主要なるものをあげると、

自然地理——天文學、測地學、製圖學、地質學、礦物學、地形學、海洋學、湖沼學、氣候學、生物學等。

人文地理——人種學、宗教學、社會學、政治學、經濟學、歷史學、統計學、人口學等。

かくの如く幾多の分析的科學に依つて得た材料知識を統合して、各種の事實に一生面を添へて之に眞義價値を與へるのである。換言すれば幾千年もの歴史を有する人類がこの地球上に生活して如何に自然に親しみ、自然の力、地理的理法に支配せられ又如何に自然に順應しつゝ人類文化を創造して來たか、又創造しつゝあるかを明かにするのである。又更に進んでは、人類は將來如何に自然と人生との關係を統制することによつて、より生活人類文化の向上を圖り得るかを考察するにある。

然し小學校の地理科は素より應用地理學であり地理學の教育的價値を國民教育に取入れたものであるから、地理學の全部でないことは言ふまでもない。即ち國民教科として意義のあるやうに、教則第六條を尊重し其の示すところを味ひ、且又學びつゝある所の兒童の年齢性別環境個性等所謂教育上の主觀的並に客觀的原理の兩方面を顧慮して取扱はねばならない。

教則によれば地理科は

一 地球表面に關する知識

二 人類生活の狀況に關する知識の一斑を得しむること

かく地球表面人類生活に關する地理事項は單なるそれ等個々の羅列ではなくして、兩者を關係づけるところの所謂地人の關係を討究することによつて地理的識見を涵養し人類生活の向上に資し、又それによつて理解的世界觀乃至人生觀を培養すべきである。

三 本邦國勢の大要を理解せしめ

四 兼て愛國心の養成に資する

即ち本邦國勢の大要を明かにするといふことは單に國民的常識として、或は自國に於ける地人相關の體得或は兒童の生活指導に資する以外に大日本帝國の國民教科であるといふ點から他に大なる意義を認めねばならない。即ち愛國心の養成を忘れてはならない。

地球上に於ける本邦の國土並に世界に於ける民族の生活々の状態如何を明かにすることによつて眞摯にしてしかも偏狹に陥ることなき愛國心を養はねばならない。

序だから一言附加しておくが、國史や地理の任務の一が愛國心の養成にあるといふのに對して彼

のラッセルの如きは其の著「愛國心の功過」に於て、極端なる愛國心は世界の平和を破壊するものであるといつて非難して居るのである。

勿論彼が獨斷的にして偏狹なる愛國心を痛撃して居る點は首肯すべき論ではあるが、愛國心それ自身が平和に害あるのではなく、恐らく偏狹なると形容せらるゝか、又は愛國心が他の野心——侵略等によつて誤られた場合に世界平和に害があり、文化の發達を阻害するのである。

愛國心が純粹なる郷土愛、自然の至情たる國民的團結心である場合、それを養成することに何の不都合があらうか、徒らに國家主義の名にはゞかつて兒童の自然を無視してまで愛國心を云爲することを避るが如きは實におこのしれものといふべきである。

而して本邦現下の狀況を察するに本科に於て特に留意徹底せしむべき諸點は次の如きものである。

- a 産業の發展を企圖せしむること
- b 海外發展の念を喚起すること
- c 東洋人としての大和民族の使命、即ち世界文化單位としての自立國家たる日本國の責務の重大なる所以

d 排他的に陥らざること

以上の如き本教科の使命乃至本質上から當然要求せらるゝところの教材は

一 教則に基いて

イ、尋常科としては

- (1) 本邦の概要（これが主要部を占める） (2) 地球の形狀運動の理解 (3) 滿洲地理の概要（我國との關係最近の事情） (4) 外國地理（本邦との關係に於て重要な地について簡単に）

ロ、高等科

- (1) 各大洲の概略（地勢、氣候、區劃、都會產物、交通等） (2) 外國地理（本邦との關係に於て重要な地） (3) 本邦の政治經濟上の状態並に外國に對する地位 (4) 地文の一斑

二 時局の變動に應じて取捨すること

三 郷土地理に關する教材を附加すること

四 基礎的觀念養成に必要な教材を附加すること。

第二十八章 作業學習と地理

地理その物が自然と人生との有機的統合現象を目的となる活動に訴へて究明する。因果の法則、地理的理法の推究によつて地理的識見を高める。更らにより多くより良く地と人との物質的精神的交渉をなし得るか即ち文化價値を創造し得るかが目的とするところになる。

この有機的關係、統合現象について、目的となる活動に訴へることによつて究明する。それは小學校程度の兒童としては或る種の作業により、地理的なる實習をなす、その或る種の作業の中に或は實習をとほして理法を推究し、識見を高めることが出來得るのである。

これを目的に見るならば、現代に於ける本邦及び世界の大勢に通じて、現代に將來になすあらんとする愛國的人格を養はうとし、日常に於ける經濟生活、文化生活の基礎を養はうとするには、作業、實習によつて地理的なる識見と、確實なる地理的知識とを理解認識せしめねばならぬことゝなる。

なる。

理法法則の推究は地圖を讀む力、統計圖表に關する實習によつてなされる。自然と人生との結合關係は、地勢圖、産業圖、交通圖などの實習をなすことによつて、地理そのものゝ内容對象とするところの地勢と産業との關係、或は地勢と産業と交通乃至は都邑の發達等との有機的なる結合關係が理解せられるものである。

又描圖する作業、讀圖する作業、校外教授に於ける實地の指導、實地に距離の測定實習をなすこと等多岐的なる實習作業によるとき、精密なる觀察も正確なる判斷力も養ひ得て、やがてそれが地理的認識ともなるものである。

第二十九章 地理學習作業の方向

地理教育に於ける作業化としては、如何なる方向を指して居るのか。それは前章に述べたるが如くに、第一には地理そのもの即ち地理の本質その物が、目的となるものであつて、國民生活としても、更らに一般に廣く考へて只だ日常の生活といふ點から考へて見ても、共に地人相關の理法によつて存在するものであるところの存在は、目的實現の生活そのものである。その目的實現の生活はこれを實質的に見るならば、世界に於ける帝國の經濟的、國際的、文化的地位についての知識技能を有する自覺する生活と、經濟生活、文化生活の基礎となる日常の生活とが、目的實現の生活過程である。かゝる目的となる所謂目的實現の生活過程を充實せしめる教育、指導は、宜敷人間生活の模式的單位なる目的實現の作業的方法、即ち作業化されたる方法によつて、目的實現の生活はより實現せられ、充實せられるものであることは言ふまでもないことである。

第二には方法としての作業的方法によることである。即ち直前にも述べたる様に描圖せしめる。

地理關係材料を蒐集せしめる、地形模型を製作せしめたりする。白地圖を活用する統計圖表を作製せしめる、校外實習をなさしめる、自由研究をなさしめるといつたこと、尙ほ其他にも多くの作業的方法はある。要するにかうした作業的方法は作業化の一方面であることである。

第三には土地の具體的研究に出發すること、自己研究法を中心とすること、が、地理教育の目的乃至方向とするところである。土地の具體的研究を出發點とすることは、書物によつて抽象的に理法を研究して行く方法と相違するものであつて、地圖を基礎として山脈、平野、その上に發達したる産業、交通、人口、都邑といった關係要素の動的状態を地圖觀察によつたり、關係分布圖を作製したりすることによつて考察することを指導する。かく土地の具體に即して地圖を読む様に導いて行くのである。かくてこそ地理的要素たる、地勢、氣候、産業、交通、都邑といった各方面が統一せられ、初めて生きて働くことになり、部分の状態と全體との關係は吟味せられ、知識的方面と相關的方面とが統整せられることになるものである。

かうした方向への兒童の研究は兒童の生活程度にも適合して居るし、生活環境にも近接して居るし、活動的でもあるために、兒童の興味ある活動に通ずるものであるから喜んでなされるものである。

第三十章 自力研究の地理作業の内容

こゝに自力研究といふのは、兒童が自己の目的を立て、その目的計畫に向つて活動するものでやがて自己の問題を解決せんとする意識的なる活動の過程をいふのである。勿論かゝる活動の赴くところは注入とか抽象の教授に反するものであり、自學であり、發動性の活動であり、自律行動をする自由活動である。思考の自由活動する機會であるは勿論のこと、全人的なる生活活動の機會である。かく目的となる自由活動の生活機會は即ち價值的な生活の生活機會である。

かゝる價値生活活動としての地理作業は如何なる内容のものか、即ち教科書を讀む作業がある。参考書の目録及索引の利用をなし、参考書を讀む。参考資料を蒐集する問題の答案を書く。地圖を描寫する。統計表、辭典、報告書を活用し實驗をする。見學をする。説明練習もする。研究の整理もする。發表の練習もする。論理の正否を吟味するといったことが行はれるのである。

この自己學習作業をなす様式に至るといふと、勿論單獨學習もある。單獨學習とは個人的なる活

動に訴へる學習の様式であつて、自己自力によつて研究を進めしめるものである。地圖を描く作業直觀物の蒐集整理、自己ノートの發表作業といった個人的なる學習作業をなすことである。

他の學習様式には兒童相互の學習がある。相互の活動に訴へるものであつて、教師は前様式の場合と同じく計畫を指導し、學習の範圍を定めたり、研究の方法を指導したりするのであるが、研究學習する方法に於ての様式が異なるのである。即ち協同團體組織にする。協同團體を作つて研究せしめる。そして研究の一段落がついたならば兒童相互の討議批評をなさしめる。教師はその共同研究の過程について凝視して居てそれが相互の研究を補説して、その欠を補ひ誤を正すなど指導をなす。次ぎには全體についての整理と總括とをなすのであつて中心に結合する價値を確持せしめるのである。かうした學習の一般過程は如何になるか。個人學習と協同學習との一般様式は即ち次ぎの如くなる。

一 問題の直觀

目標の指示決定。 既得生活事實の想起發表。 問題の構成。

二 問題研究

方法計劃。 資料蒐集。 實驗、調査、實習、製作、事實研究。

記録。 研究結果発表。 検討、協議。

新問題構成。

三 整理指導

総合的理解。

次に自力学習作業の活動を指導するに當つては、次の如き注意を必要とするものである。

- 1 児童が自力学習活動をなすにあつては、教師も共學する態度をとることが、その活動を一層盛ならしめるものである。
- 2 研究の態度に關する訓練をなすことが必要である。
- 3 教師の仕事はやつぱり指導といふことにある。教師は児童の問題解決に於ける要素中の一要素であるから適度の助力を越え児童の助力となつてはならない。
- 4 綜合に於ては、教材一部の詳説も、内容に關する原理原則の説明も、自由研究の補足等も必要なことがある。
- 5 個人研究の場合も協同實習の場合も共に個人的指導が必要である。

第三十一章 實習作業の内容

兒童に課す實習の作業内容はどんなものか、それは兒童の程度と教授の時間との關係から考慮して有意義なるものと思はれるものを次に掲げやうと思ふ。

一體兒童の發達上に於ては環境の物質に對する直接經驗によつて基本知識を得るものである。即ち筋肉活動と意識の發達とは密接不離なる相關關係の存するものであることは、今こゝに改めて述べるまでもなく、こゝに方法として實習作業を重んずる所以も、内容には心的活動乃至價值評價を含ま外形方面には實感的具體的の作業成績を得るからである。

かゝる作業は目的ある活動であつて、目的及び結果の意識は明瞭である。活動の過程に於ては目的實現の手段を工夫し、自ら資料を蒐集し、自ら工夫し、舊知識を適用して新知識を獲得する。結果の成功したる時は、多大の満足喜悅を作ふものである。要するにかゝる構成作業は、たゞに心理的學理的の活動であるばかりでなくて、目的到達のための外界に對する價值ある活動力であること

は言ふまでもない。

地理學習に於ける實習作業としては如何なるものが有意義に行はれるか。これ等の作業は即ち自力自主の研究によつて活動する部分がないのである。

第一節 讀圖力の實習

地圖とは何か、讀圖力とは何か。

地圖は位置方位距離廣袤等平面的の意味は、高低起伏の状態を平面上に垂直的の意味を描出し、自然相互の關係狀態、人類相互の生活狀態並に自然と人類との直接間接關係を意味し物語るものである事は言ふ迄もない。此の點と線と色とによつて描出せられたる地圖によつて想像乃至推理作用に訴へて未見未踏の地を實地見聞するが如く意識し、理解し得る能力を讀圖力といふのである。

第一地圖の讀解は地理學習の第一武器であり、根本基礎である。其故に其の基礎教授の時期に於て地理學習の基礎として研練せねばならぬ。第二に彼等の生活上地圖に接する機會が多い。故に之れが讀解の能力は本科學習の目的から見ても必要である。されば教授上に於ても「地圖は地理教授の出發點である。」とか「地圖に歸結せよ。」「地圖を習用せよ。」「地圖を教授の中心とせよ。」とか

昔から幾多の地理學者乃至教育家によつて繰返へされたのである。然らば地圖を能く見、考察し、地理上の現象を理解する能力の内容は如何といふに、前述したる地圖の意味する内容即ち平面的垂直的の地表上に於ける生活狀態を接間的に直觀し了得し得るにある。即ち方位に於ては地圖に對面したる時地圖と地表面とを結合して同様に考へ得る力であり、距離に於ては縮尺關係を理解し、實地距離を想像推知し得る力である。高低起伏については平面的存在を意識し、更らに立體的存在を想像認識するを得る力である。其の力は直覺的に圖上へ垂直狀態を想像描出し得るに至つて頂點に達する。自然と人生現象については代表記號にて、鐵道、航路、都邑、山川、建物等を考察的に理解し、自然相互、人生相互乃至自然と人生との關係を比較し推究し考察して、其處に活動實體を意味視し得るにある。以上の作業實習は地理學習上最も必要である。

實習方法

郷土及一般地理的教材については、定期又は臨時に行はれる旅行及遠足乃至校外教授によつて隨時に觀察法、讀圖力の基礎を指導せられ、或は尋常四年以下の讀方及其他の教科目に現はれて居る地理的教材を直觀的乃至地方的に取扱ふことが必要である。以上の基礎的準備的の教授指導によつて讀圖力の基礎乃至地理的基礎觀念は出來て居ても現在の狀態に於ては系統的に學習したものでな

いから整理的に系統的に指導するがよい。稍根本的の問題に觸れるが現在使用の讀本を改造して讀本其物を純文學的の物とし、現教科書中の地理的材料、地理的材料のための材料を郷土科に併合して尋常一年から郷土科を課し尋常四年から地理科を置くを最も至當なる方法と信するものである。之國語科地理科相互に本質的の系統教授が出来る事となる。余の經驗よりすれば系統的整理には總合的發展的の取扱でなければならぬ。即ち縮尺方位距離廣袤高低等を個別的に整理し練習する等のことは却つて難解に導くものである。

第一過程

- 1 第一教室及學校を中心として方位觀念の整理と描出をなさしめる。磁石を用ひ北を基本として東西南北及間位を整理し、教室又は學校の間敷を實測せしめ、之れを方眼紙上に平面として描出せしめる、方眼紙は大きな物を使用し、第一過程全部の記入に使用するが便である。
- 2 學校附近の距離又廣さ建物を實測乃至歩測なさしめ、方眼紙上に表明せしめる。此所で實測、目測、歩測の實習をなさしめる。
- 3 此の實測、歩測、目測によつて作つた縮略圖を基本として粘土又は砂地圖によつて模型を作らしめる。

- 4 自作したる模型を基として地圖を作らしめる。其の際に種々の記號を授ける。即ち、人家、川、鐵道、電信電話、道路（國縣里道）橋梁、聯間歩路、石段、神社、寺院、水田畑地、樹木を記號によつてし、用紙の上を北として表はすことである。

第二過程

- 1 自己の家より學校に至る附近の歩測實測乃至觀察を略圖に表はさしめる。方位縮尺距離廣さ高低に對する描出法の指導をする。即ち記號による描圖練習をなすのである。
- 2 校外教授により歩目實測し、觀察事項と合せて略地圖を描かしむ。磁石の使用に慣れしめ、山の高低及頂、山脈、谷、原、盆地、平野、河川の觀念を明かにする。
- 3 此の頃教室及校庭に装置したる寒暖計、風力計、雨量計によつて計量の意識的觀察的乃至意識的實習をなさしめる。
- 4 海岸に出て海に關する地理的事項を整理し、（海岸線及深淺の測定、海水、生物等につき）實地指導をなし、海岸線、深淺の表出をなさしむ。

第三過程

- 1 郷土の精密なる地圖を提示して、實地と比較考察せしめたり、觀せしめたりする。此の時は

陸地測量部發行の二萬分の一、五萬分の一圖を對照せしめて地圖を便りに遠足せしめるもよい。測量部地圖に於ては、記號の見方等高線の讀方及方位縮尺と實際距離との關係文字の大小と對部落の區別等を整理してやるがよい。

2 余は此の頃横濱市の鳥瞰圖（本校兒童「用横濱地圖」として發賣したるもの）を提出して彼等の直觀事項の記憶を想起せしめ之れを實際地圖に描かした。之れが総合的習練となつたので讀圖力向上に非常なる効果があつた様である。

3 附圖をよく見させる種々なる問題を提出して、考察せしめたり説明せしめるがよい郷土の各地方に對する地位及日本に於ける地位等をも知らしめるがよい。

4 尋常小學地理附圖の圖例及諸記號についても整理指導するがよい。

5 余は一面に於て問題法により郷土地誌の整理をなした所が、兒童は興味を以て事に當り良好なる作業學習態度が出来た。

第二節 描圖による學習

略圖描寫

短時間に要點を正確に自由に描かしめることを主眼とする。熟練と經驗によりて効果の擧がるものであるから練習に努めるがよい。三角形菱形弓形直線等を基本形として重要部分を簡單に描かせるもので、地理學習の初めより隨時練習して置くがよい。勿論郷土地理教授の時期に於て、左記各種の學習が行はれる様には決して望まないで、只だ其の基礎的方面の養成に努め、各地方學習の進行につれて次第に其の能力の習練せられることを望むものである。

白地圖練習

白地圖に既習事項の整理のため記入するか、研究しつゝ記入するかの方法である。之を内容的方面から區別すれば、山川其他の地勢等自然地理上の事項を記入するか、産業産物、都邑人口分布、火山交通状態等人文地理上の事項を記入する方法である。高低模型白地圖などの賣品を購入して使用するもよし、豫め兒童に轉寫せしめて置いてよい。兒童が研究の必要にせまられて其の場合轉寫するもよいと思ふ。之れは兒童の研究にも、教授の總括にも用ひて効果がある。小學校に於ける轉圖は附圖上に轉圖せんとする用紙をのせて透き寫す位でよいと思ふ。

断面圖製作實習

土地の高さ傾斜を具體的立體的に表示する必要がある。其の必要から断面圖の製作實習をなさし

める。作り方は作業中複雑なるものであるから、模型を作り置き等高線式地圖と断面圖と比較して描法を指導するがよい。

擴大及縮小實習

擴大の場合は原圖と同大に描く場合と原圖の倍數に描く場合とある。同大の時は原圖にも洋紙にも同大の縦横線を引き方眼區劃し、倍數描寫の時は外廓を原圖の倍數にとりて描寫するのである。縮圖の場合は洋紙に原圖の何分の何と外廓をとり、原圖と洋紙に方眼線を引きて記入して行くのである。此の時縮尺は縮圖のために倍數分の一となることを忘れてはならぬ。

同刻圖製作實習

或交通中心點より鐵道、汽船、人力車、徒歩等にて同一時間内に到着し得る地點を連ねて交通乃至文化状態を知得せしめるものであつて、小學校に於ては白地圖に記入するに止め、東京大阪等の交通文化の代表的地點を實習に充てる位でよい。

尙小學校に於ては地球の投影圖法による地圖なる事の理解の見方は知らしめる必要はあるが描寫方法を教授する必要はない。

第三節 器器械具による學習

卷尺測定による實習

實測に是非必要である。繩を以て代用してもよい。

兩脚器使用

地圖上の距離を計りて實際上の距離を推定せしめるものである。殊に比較兩脚器の如きは距離を正確に測定せしめるに最もよいが、小學校に於ては全兒童數だけ設備上望めない。

縮尺計

海陸距離の測定距離より時間の測定方位の指定、河川及海岸線の測定、山脈の延長幅の測定、面積の測定等に利用し得るのである。賣品としては東京の最新教育品普及會から出たものと大阪の愛國堂から出たものがある。愛國堂の物の方が價は高いが便利である。附圖の縮尺の相違により尋常科用高等科用と二種ある。畫用紙に印刷自製し得る効果の極めて大なるものであつて且つ、兒童の興味も強く起すものであるから必らず備へるがよい。

其他曲線計、步數計、輪程計、測斜器、面積計、經緯儀、六分儀等のある事、正確なる地圖描寫

には分度器の各種を用ひることと簡便なる方法として縮圖器を用ふること等を授け研究心の誘導に努めるがよい。

第四節 觀察實驗蒐集調査實習

歩測圖の製作

圖畫用の圖板、曲尺、三角定規、磁石、方眼紙を携帯せしめて、日常最も接觸し得る場所によつて指導する。直線道路の部分から曲線道路の作圖に及ぶ様にし、歩測の一定練習をなすことも必要である。先づ最初に實際の距離と歩數と縮尺との關係は各自に表を指導作製せしめる。次に尋五の一兒童が自作使用した對照表を示さん。

歩數(歩)	實際の距離(間)	
	女	男
4	3	1
8	6	2
2	9	3
16	12	4
20	15	5
24	18	10
28	21	10
32	24	30
36	27	40
40	30	50
44	33	100

縮尺(寸)
0.3
0.5
0.9
1.2
1.5
3.0
6.0
9.0
12.0
15.0
30.0

道路を中心とし歩測する時、其の側面にある田畑、樹木、建築物を歩數と距離と縮尺と合せて磁石の方向に對照的に方眼紙へ記入せしめる。注意すべきことは(一)方眼紙に對する位置と歩測の方角とを誤らぬ様にせねばならぬ。(二)誤らざる様に最初は歩測地域の略圖を描かして概念を得させてから後、歩測に移るがよい。(三)方位縮尺を必ず記入すること等である。

模型製作實習

模型は地圖と實際土地との媒介的教授直觀物の隨一なるものである。然し一つの注意すべきは平面縮尺と垂直縮尺との地形傾斜度の不一致のことである。

種類としては砂模型、粘土模型、新聞紙又はボール紙による類層模型がある。砂模型は正確には行かぬ。粘土模型の製作は板上に粘土を積み上げて直觀的地圖を作るもので、正確に近いものとしては、水平垂直縮尺の平面地圖上に粘土を積み重ねる。永久的のものとしては新聞紙を煮沸して糊を加溶し、地圖貼付の板上に水平垂直縮尺に基づき高低を作り、蔭乾にして作るか、ボール紙メー

トル高低に比例して累層的に累積し着色する。

統計圖表製作實習

地理的事項の發達進歩狀況及經濟上の現狀を直觀乃至明確ならしめる爲に製作するもので、思考判斷力と精密觀念を養ひ、興味を促すものである。圖表の種類としては、(一)平面圖上に細密なる點を以て表はす點圖、(二)統計數量によつて線に長短を表はす線圖、(三)數行列により表示したり三角四角多角等にて表はす平面圖、(四)點にて表はしたり、分布圖、密度圖、平面地圖としたり、形象地圖とする地圖の四様式がある。注意すべきは統計の正確と選擇の宜しきを得ることである。

第三十二章 地理學習指導の實際

尋常科第五學年

教材 中國地方産業

目的 中國地方に於ける産業を自然地理と結合せしめて各自の勞作に訴へて探究し其の産業と我が國家經濟との關係を發見せしむるを以て目的とす。

過程

- 一 學習範圍の決定と學習作業の方向を暗示的に指導する。
資料を提供する。
日本全國雨量圖、菊地氏産業グラフ、年鑑類、産業分布圖、標本類、掛圖類、その他參考書。
- 二 獨自學習に於ける問題構成。

問題に就きての研究（共働的作業）

三 兒童の日常生活に直接關係ある處の中國地方の産業の價值研究。

問題資料

1 鹽、——產地、産額、地形及び氣候との關係、製鹽方法の説明。

2 牛肉、——牧牛地方、我國牧畜業より見たる本地方の價值、牧畜と地形地質の關係、

罐詰製造方法説明。

3 工業——綿糸、綿織物（交通關係）

疊表及び花筵製造

4 水産業——内海方面、日本海方面。

四 山陽山陰兩面の産業分布上の比較研究、兒童より當然起る問題として扱ふ。

地形、氣候、交通の及ぼす人口分布の有機的な關係を究明させる。

五 地形圖、交通圖、産業統計表、産業グラフ等の製作々業を課す。

備考

一、因果關係より自ら法則の發見に進める。

二、實習作業を重んじ、具體的の了得を計ることに充分意を拂ふ。

尋常科第六學年

教材 朝鮮地方

目的 朝鮮の地人關係を了得し、内地との比較をなしその相異點を確實にし、且つ史實に關聯せ

しめて大陸續きの土地は今日迄如何なる變遷を經過せしかを究明するに各自の獨立的勞作

研究を以てせんとするにあり。

殊に政治史に就きては一層の研究と道德的取扱ひに突入して深き國情愛の精神を向けんこ

とに心掛けなければならぬ、

學習勞作過程（七時間）

一 自然的位置より人工的位置への大觀により素朴的な勞作研究の直觀生活を行ふ。

二 獨自研究による自己擴充より共働研究への共同擴充に進める。

三 研究事項の發表と道德的思想の喚起及作業。

作業様式の大綱

1 獨自研究として、目的、範圍、時間及び方法の決定をなす（勞作豫定立案）

- 2 研究に對する資料の蒐集をなす。
地圖（地勢、氣候、生物分布、人口分布、交通）參考書、繪畫、繪葉書類、標本模型、產物、各種統計表、統治に關する資料。
- 3 研究録作製。
個人又は分團の作業。
- 4 研究物による討議と發表。
- 5 指導者の補説。
- 6 地圖、統計表の作製——部分的了得。
- 7 朝鮮統治上の研究——因果法則の發見。
- 8 朝鮮の史實と今日の文化。
- 9 將來の朝鮮につきての道德的判定。

備考

以上の勞作を同時に配當し一層具體的了得の學習生活を計り且つ指導せなければならぬ。

高等科第一學年

教材 第一亞細亞洲。八、印度支那

目的 我が國との關係事項を研究し徹底せしむるため、その地形、産業、氣候等の地理的現象を各自の勞作的研究に訴へ、有機的な考察を自得せしめ、併せて地人關係を體得せしめんとするにあり。

學習勞作過程（二時間扱）

一 學習の目標の決定。

獨自學習に出發して次の事項を調べる。

産業上から見て、

佛植民地として重要な所以は、

英植民地として大切な所以は、

我國と古來から關係する處は、

二 作業中心の獨自學習。

イ、氣候圖を読む、（第一圖、第二十圖）

ロ、地勢圖の作製、

ハ、産業分布圖作製、(第一、二、五、六、二十一、二十二圖)

三 研究問題の發表作業、

イ、位置、區域。

ロ、氣候、(乾濕二季を示すグラフ) 氣温と雨量との關係、雨量と地勢との關係、

馬來半島の雨量は他とは異つてゐることに注意、

ハ、地 勢

印度支那山系の狀態、

大河の源、

各河川の三角洲平野、

川と交通、

ニ、産 業

地勢、氣候、生物の各關係につきて、産業分布と地勢との關係、

米の産地、産額、(統計表參考)

盤谷博物館の米の種類は約一千種あり、

我が國でいふ、(外米、南京米)

チーク(理科的考察研究)

伐材より輸出までの経路

其の他の産物の問題解決、

總べて具體的了得の方法をその勞作活動上に考すべし。

四 區分、地誌の研究、

イ、ビルマ、印度との關係を調べる。

ロ、シヤム、我が國との關係を特に調べる。

ハ、佛領印度支那、佛の重要殖民地としての所以を調べる。

ニ、海峽殖民地、馬來聯邦。

シンガポールと英國の關係を調べ最近に於ける英國の政治的軍事的の計劃等委しく調べさす。新聞切抜き等の參考物提供。

五 勞作研究に成る要項を地圖の上に對照して整理する。

我が國との直接關係事項は特別に具體的な研究發表をなさしめ尙教師より補説する。

備考

兒童の勞作生産物（各種統計、各種圖面）はこれを展覽し、共働的批評鑑賞を行ふ。

高等科第二學年

教材 模型地圖製作。

目的 模型地圖の共働製作により、勞作精神の涵養中に地理的趣味を向上させ、以て興味ある地理學習の一方面を開拓し、讀圖力の養成に資するを以て目的とする。

材料 古新聞紙、日本紙反古、糊又は布海苔、板、胡粉、鍔（針金、八號位）刷毛、針金二十一號、炭酸紙、曹達、美濃紙、吉野紙、ゼラチン、繪具、ラック。

準備

- 1 材料の蒐集、（個人的又共同的に前以て定めて置く）
- 2 地圖二枚（寫したもの）用意。
- 3 製作の順序、方法、注意等を考究し置く。

4 新聞紙を細くしてバケツ又は水槽中に三四日水に浸し置き、金だらひにて曹達を加へて煮る。それを水洗ひすること數度、袋に入れて絞り、布海苔を混ぜて溫めこれの冷えたのを主な材料とする。

過程

一 製作上の順序、方法、注意等の研究發表とその整理により自得する。

方位、比列尺の考察、（垂直比列は水平の二―五―三、〇とするが普通）

二 製作。

イ、乾燥したる板（厚さ任意）

ロ、美濃紙を二重通り貼る。

海岸線、河川等正しく引寫しす。

最高點に針金を立て目的の高さに切る。

低所より順次薄く積み上げ、地圖と對照しつゝ鍔にて地形を整理する。

大體の出來上りを日陰乾とす。

生乾きするとき地形の訂正をする。

日陰にて充分乾燥させる。

胡粉（ゼラチンを加へ）一三回塗る。

ゼラチンを塗る。

着色、（共働的に工夫考察する）

色止めをする（ラック又は白ニス）

備考

- 一、本教材には何れの地圖を用ふるも可なり郷土地圖等の製作は又興味と實力とを加ふ。
- 二、何れの學年にて製作方法を工夫することにより自由にて課することを得。
- 三、文字記號等の記入は餘り強ひなくてもいゝと思ふ。
- 四、其他粘土細工にて建物、施設物等を入れさせるも亦或る興味を加ふ作業となるべし。
- 五、要するに作業の精神を充分體得せしめて課さねばならぬことであることは云ふ迄もなきことである。

第三十三章 國史科の本質

抑も國史はそれによつて現代を理解し將來に對する助言を得しむるものであるとせらるゝ。かゝる効果を有する國史を更らに教育的見地から組織したものが我國史科そのものである。

とかくの異論はさておいて先づ國家とは如何なるものであるかといふに、それは我々人類が組織した社會のうちで最も鞏固にして合理的に成立して居る團體であるといふことが出來ようと思ふ。

特に我國の如く國家編成の根本條件たる主權が一系で民族は血統上連綿たる連續性を有して居ると云ふ特異の發展をなして來た國家結合は、他の國家とは自ら鞏固さに於て一頭地をぬいて居る。

かゝる特殊な條件を具備して存立し發展しつゝある我國家に於ける國史科は當に如何なる要求のもとに組織せらるべきであらうか。

先づ第一に擧ぐべきはその關心の中心が我國體の發展を明らかにする點に存することである。彼の教則第五條にも「國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フ」と明言してある。そも〳〵日本歴史をことさらに國史と改稱したのは單に外國歴史と區別せんためのおもはれる日本歴

史の名稱より我々の祖國の歴史、我祖先の創造した歴史といふ意味合があると考へられる。國史といふ名稱にしたのであらう。國史の教育には先づ祖國の歴史であることが念頭に來るべきである。さてその祖國の歴史、我祖先の生命進展のために選り來りし過程は如何といふに、それは實に皇室を中心とした文化創造の歩みであつた。

幾千年の間國民にはこの理想が絶對價値を有してゐた。我々はその生活、史實の中に祖先を見、祖先の文化遺産を繼承した我自らを見得るのである。

然るときにこの國體觀念の闡明と育成とに關心の中心をおくことは我國に於ては妥當にして必然的なるを覺ゆるのである。

第二に擧ぐべきはその倫理的宗教的識能である。由來歴史がこの倫理的効果を多分に包含して居ることはその特色の一である。

應用史としての價値の主要部分はこれであり、見方によつては前項の事柄もこれに包攝せられ得る。

我現行教科書に於いても、その素材の選擇より表現までこの目的を達せんとして多くの努力が費されて居る。

即ち史上の人物の幼時の逸話を説きて教訓を得しめ、更にその人物に景仰の念を起さしむる事を豫期し、科學的には價値少くとも、隨所に教訓的事實をあげ信仰的史實を述べ道德的宗教的陶冶を期待して居る。

かの國體觀念も國民に信念なる一種の宗教的境地を要求してゐるものと考へらるゝのである。

第三には歴史教育の情操陶冶價値を擧げなければならない。

元來教育は單に知ることのみを以つて能事終れりとすべきではなく、知ることを更らに生活にまで持ち來たさなければならない。

我國體の善美を知悉し民族理想を體得し、得たとき更らにそれによる感激と、自己自らの行爲の上に實現せんとする意志力とを養成することを念とすべきである。換言すれば歴史教育は將來の歴史構成者を作ること目標をおかなければならない。

勿論認識と情意力とは分離すべきではなくそれは全一體として作用し、そして情操がその全一體の中核をなして居る。

國家としては日本民族としての情操、一時的無方針なる發作的情緒でないところの永續性ある明智の導く強き情操を養ふことに注意が指し向けられて居るのである。

既に應用史が認められ、國民教育の一教科として教育的見地から國史が組織せられたとき、國史教授は努めて前述の如き國家的要求を充足すべきものたることは言ふまでもない。即ち國史教授の任務は我が民族生活を知らしめて現代を理解せしめ將來のよき歴史の創造者たるべき忠良なる臣民を育成するにある。しかし、我々がこゝに忘れてはならぬことは、歴史の對象は文化全般に亘るべきことである。

個々の事實が各特殊なる様相を呈しつゝ生成發展する様を認識する力、即ち所謂史觀の養成といふことも亦忘るべからざる本科の一大任務である。

我國史發展の個々の相を研究しつゝその個々のすがたの中を流るゝ理念を發見せんとするとき、またそれは祖先の理想であることを知り、その理想活動が現在を招來したことを意識するとき、これが國民志操の養成に資することも蓋し尠少ではなからうと思ふ。

かく文化的研究の眼を開かしむるとき、國史によつて作られたる忠良なる臣民は即ちよき文化の創講者、寄與者となり、國家の文化の上に更らに世界文化の貢獻者となることが期待せられよう。又一方これを思想問題の方面から考察するとき歴史は先人が如何に外來思想を處理したかを知らしむることによつて各自の當に歸着すべき點を暗示し、着實際健なる我國の精神文化に裨益すること

が出来るのである。

要するに國史科の目的は國民教育の見地から選ばれたる國史の任務を實現するにある。

そして一方、兒童の自然を蹂躪せざる程度に於いて又國家の要求と抵觸せざる範圍に於いて能ふ限り歴史そのものゝ目的を併せ考ふべきである。殊に特異な發展をなし來れる我が國體、即ち御歴代の御稜威と皇室を中心とする國民生活の生成發展のあと及び直接間接に國體に影響し國民生活を向上せしめたところの一般文化を理解せしめることを重視すべきである。

かゝる見解のもとに選ばれるべき教科組織の實内容としての教材は既に教則第五條にも明示せられて居る通り、(1) 建國の體制、(2) 皇統の無窮、(3) 歴代天皇の盛業、(4) 忠良賢哲の事實、(5) 國民の武勇、(6) 文化の由來、(7) 外國との關係等を知らしむるに足るべきものでなければならぬ。

我國は國民教育の立場から國定教科書が編纂せられてゐる關係上自由に教材を取捨選擇することは許されて居ない。故に吾人としては先づ教科書の教材選擇に於ける國家の意志と方針とを知つてそれに背反せざる範圍内に於て教材の附加と敷衍とを行ふべきである。

而して吾人が望むところの附加教材としては郷土的教材及文化教材であつて、前者は兒童の生活に直接關係を及ぼせる一村一郷のうちに國史的事件の存立せる遺跡、傳説等であり、後者は政治軍

事方面でないところの學問、藝術、宗教、經濟等の方面から選ばれたる兒童化し得るものである。

第三十四章 作業學習と國史その物

國史即ち小學校に於ける國史その物は、過去に於ける吾が國民生活、國民文化の状態を如實に觀照せしめ理解せしめ、やがてそれが國民文化創造への飛躍を期待するところにあることは明瞭なることである。この國民文化乃至國民生活の觀照と理解とは如何にあるべきか。

國史に於て取扱ふ材料その物は一回生起的のもので、再生しない個性を認識する。即ち日本の個性を認識するのである。日本の國史の全系を學習する間に各人の個性を認識する、更らに各時代の個性を認識する、更らに各時代の個性を認識し、他國と違ふ日本の個性を了解し、日本國民として生活する意義を了解して、我が國體に順應し、我が國家と共に生きる精神を了解するところにある。

かく各人、各時代日本の個性を了解することによつて、日本國民としての生活をしてゐる自覺を

起さしめ現代から將來の生活への目的を内含する生活の指導であることになる。かゝる目的々なる活動は即ち動的なる生活である。動的なる生活、目的々なる生活を理解することは目的々なる活動を希求する精神の上に、そして目的々なる生活の中に建設せられねばならぬものである。これ生命の伸展であつてそれは生活であり、創造の體驗生活であつて、國史の教育に於ては國史の了解であり、創造であり、自らの作り出しである。單なる知識或は概念としての授與ではなくて、所産である。創造、所産であるからには、史實を材料として精神の産み出し、觀念の構成としての精神的なる生産創造でなければならぬが、それに續いて精神的なる生産に連關する手技の方法を以てされることである。かく考へるところに國史の本質的要素が作業的要素への接觸することを明瞭ならしめることが出来ると思ふものである。

要するに史實を材料としての精神的なる生活創造といふことは結局は精神的なる生活體驗のことである。國史その物を了解するところ、それが國史その物を創造することである。その生活の姿が所謂作業的の國史學習である。

第三十五章 國史作業の方向

以上述べ來つた精神的なる生産創造としての國史の創造即ち國史の學習の方面は如何にあるべきか。

第一節 時代の觀念

國史の學習に於て最も大切なるものに時代の觀念がある。これ國史學習の中心觀念となるべきものである。それ故兒童の腦裏に確實なる時代の觀念を認識せしめて行かねばならぬ。かく中心となる時代の觀念は如何にして作出認識せしめるか。それには年代圖の如き、その年代を個性づける直觀物を自身に蒐集せしめたり、整理せしめたりする。又そうした直觀物を蒐集してある環境の中において學習生産の仕事學習の活動をなさしめるなどはその良い方法である。

然し茲に問題として考へねばならぬことは、只だその材料史料を附與するにあらずして、兒童自

ら時代の觀念を産み出さんとする立場に常に立たしめることが必要である。色づいてある時代個性を自らの精神内に攝取することによつて、自らが産出する態度をとらしめることである、直觀物としての遺物、史材はかゝる立場に置く時實感を強くあたへる。その實感は歴史的に經過せられたる時間そのものについての實感となるのである。(史材とは遺物・古書畫・模型・寫眞・繪葉書等をいふのである)

吾々は所謂直觀的なる史材によつて時代的個性を感得し、時代觀念を作出するといつたが、その直觀的史材といふことと關聯して、史實といふことが考へられるのである。史實を自らの心の中に自得すること、構成することによつて時代の觀念は構成せられるものである。従て吾々はこゝに史材と史實の直觀と自得とによつて、國史學習の中心觀念とする時代の觀念が構成せられるといふ結論に至つたのである。

第二節 現代的の考察

史實はたゞ過去の物として、それが時代的個性を感得せしめることに止つてはならぬ。時代の感得、構成は、現代の今日、我等の生活に何を與へて居るか、いかに交渉關係してゐるのかについて

の眼を開かせることが必要である。こゝに現代に生き將來への國民文化創造への目的と方法とを期待することゝもなるのであらうと思ふのである。かく現在の生活を高め將來の理想を期待することは、現在、未來の發展力の導きとなり、具體的に國民精神を心身の中に再組織し、自らの心の中に自ら産み出すことゝなるのである。

第三節 情意的の陶冶

國史の教授は單なる人物の事蹟とか、政治の様式、戰爭の始終、産業の状態、藝術宗教の勃興、特質等についての事實を取扱ふことによつて理論的なる力の培養といふことに方向があるのではない。大いに情意の活動に訴へるのではなくてはならない。理想に燃え、情熱的と意力的とを以てしたる活動の心境に接觸せしめる。熱なき型の如き講演に終つてはならない。宜しく教師自らの心の燃ゆることが必要である。而して兒童の心内に潜む生命力を自覺せしめ得るものであり、やがて開拓することが出来るものである。

又兒童をして眞に自らを國史上の舞臺の人たらしめる。即ち材料を自ら究めることによつて、藝術的なる表情の演技の表現をなさしめる即ち實演をなさしめることもその一方法であると思ふので

ある。實演まで行かないとしたところで國史の發表會の如きものを行ふもよい結果をもたらすものである。要するにかゝる方向への陶冶は全人的なる陶冶であるといへる。

第三十六章 國史作業學習の方法

國史の作業化は實際上どの程度に行ひ得るかといふことが問題であるが、何れにしても要は兒童をして目的々活動をなす境地に立たしめて、これが能動的なる活動をなさしめることにある。それが生産としての力の陶冶であり創造の力の陶冶であることになる。

しかし始めからこの精神で、研究のプランを立てさせ、たゞ單に兒童用國史參考書位で研究としての目的活動をなさしめる。そして國民活動の事實と精神とを了解せしめるといふことは一寸難かしいことでもあり、又十分なる精神的生活の體驗としては出来ないことでもある。

かうなるとやつぱり國史の作業化學習は、この程度になる。即ち(一)兒童の求知的の活動を促し、この求知的なる活動を基調として精神的作業としての學習を進めて行く。(二)教師の洗練せら

れたる觀照よりなる史的根據と教育的立場とから題材を見て史眼とか史的態度とかを確立しそれを兒童の精神的體驗に合一する様に説いて行く全人的なる取扱ひ方法をとる。(三)兒童が精神的體驗によつて了解までには至らない題材を、兒童の自由なる自己活動として産出創造せしめる方法としての了解驗出の方法をとるといつたことは、所謂教授の様式を産む方向であらうと思ふのである。以上述べた様な三種の方向は獨立して一方的に行はれることもあり、複合して行はれることもあることは言ふまでもないことであるが、今これが複合的に行はれる場合を吟味して見ようと思ふのである。

第一節 自己作業（自學研究）による方法

これは兒童の求知活動に基づいて史實を自學研究によつて究明する自己作業學習である。この方法は國史の體質的要素に十分觸れることは出来ない。たゞ單なる自己作業、生産作業であるに過ぎない即ち本質的要素に接續する作業的要素の作出ではないことになる。國史について考へて見れば斷片的なる事績の蒐集、究明に陥り易く、時代の精神的個性の把握といふことにまで到達し難いものであることである。

一 題材の直觀

- 1 活動の動機を起す。
- 2 目的の指示、決定をする。
- 3 前の題材との連絡を吟味する。
- 4 本時研究の主要なる内容を吟味する。
- 5 研究問題を決定する。

二 自由研究

- 1 研究方法を計畫する。
- 2 参考書による研究、資料についての研究。
- 3 記録する（ノート作業）又は製作する（製作々業）
- 4 研究結果を報告せしめそれを検討する。

三 題材の確認

- 1 中心點の整理をする。（説話、力説、補説）

第二節 主として筋肉作業による方法

こゝには主として筋肉作業に訴へる方法によつての國史の學習方法を述べるのである。勿論作業化といつても程度の差がある様に、主に筋肉作業に訴へるといつたところで、やはり程度問題であつて、こゝに述べる方法に於ては、意味内容を十分に持たしめつゝ、即ち内容に學習と作業とが渾一してのもので、その方法なりが筋肉作業活動の部面の多い方法であることになる。

この方法に於ては如何なる過程を経べきであるのか、それは大體に於て次ぎの様になるのである。

一 題材の直観

1 興味の喚起をする。

2 研究問題の決定をする。

二 自由研究

1 史實内容の究明をする。

2 研究作業をする。

(國史地圖描寫、年表作製、系譜作製、ノート作業等)

三 題材の確認

1 自己訂正相互訂正をせしめる。

第一節に學げたる自己作業による方法と極めて接近してゐる方法であるが、只だ少し異なる點はこの方法は名の示すが如くに主として筋肉作業による活動の部面が多いところにある。その題材の確認に於ても教師の力の多くを借らずに、自己の訂正と相互訂正といふ比較的精神作業の分野がないといふ點に於て異つて居るのである。

第三節 劇化と試演による方法

この方法は何れもの教材がかくすることが出来るといふのではなくて、多くの材料には劇的場面の多くが内在されてあるから、この種類の史實をして如實に表現せしめようとしての方法である。この精神の上に指導して行かねばならぬのである。勿論對者は兒童であるから兒童らしい簡單なる筋書きと、試演であつて當然のことである。

次ぎに著者が實際研究したる方法過程を掲げ、更らにその指導例をも掲げることとする。

◇一般的形式

A 動的直観への誘導(主として兒童の獨自研究)

a 問題の發見……………三方法

- 1、前時の終りに……………好奇心、求知欲をかる。
- 2、數日前より告知板に掲示しておいてやる。
- 3、當該時間の始め頃にする……………これはよい方法ではない。

b 問題解決の工夫……………二方法

- 1、立案
 - a、教科書を読む。
 - b、他人にきく。
 - c、圖書館に行く。
 - d、過去の記憶を喚起する。
- 2、資料の蒐集……………立案について蒐集する。

c 解決に向つての努力……………三方法

- 1、蒐めた資料につき、定めた案に従つて研究する。
- 2、研究した要點をまとめて記録する。
- 3、問題の答案を作つて見る。

B 動的直観(體驗)への擴充

a 研究結果の表現……………

- 1、口答に依るもの……………教材の性質、内容乃至兒童本人の個性に依て2、3を使用する。
- 2、筆答に依るもの……………効果は多い。
- 3、實演に依るもの……………(劇化)……………効果は多い。……………兒童をして實際的地位時代の特質情緒を高調する。

劣生から容易なる問題に就て發表せしめつゝ、漸次難問に進んで優生に發表せしむ、教師は一步步々と難局に追ひつめ行くやうにしたい。而して漸次に追ひつめ行くところに疑問が起り、好奇心がわき、欲求(解決)へとなり新問題となる。これは行き詰つて兒童が中心に一個の充されぬ空虚状態をさす。この空虚を充すに問題の性質によつて解決の方法が五ツある。

- 1、直観的解決
 - 外的活動による解決
- 2、實行的解決
- 3、想像的解決
- 4、情緒的解決
 - 内的活動による解決
- 5、推究的解決

b 新問題の發見……………

以上五ツをコンデンスした綜合的方法がよい。演劇乃至活活動寫眞が最もよいのである。

さもなければ、直観材料を蒐集して、理解をたすけ、想像を促すと共に教師の巧妙なる説話による。

説話には二形式ある。次の如し。

- 1、明快なる解明的説話……………論理的、平面的……………知的教材に適す。
- 2、巧妙なる構成的話術……………直観的、立體的……………情的教材に適す。

- c 新問題の解決………
 - a、兒童の獨自研究によつもの、
 - b、協同研究
 - A、兒童分團にて、
 - B、教師と兒童にて………
 - a、教師發問示唆するもの
 - b、教師相談相手になるもの
 - c、教師講演し、兒童聴取

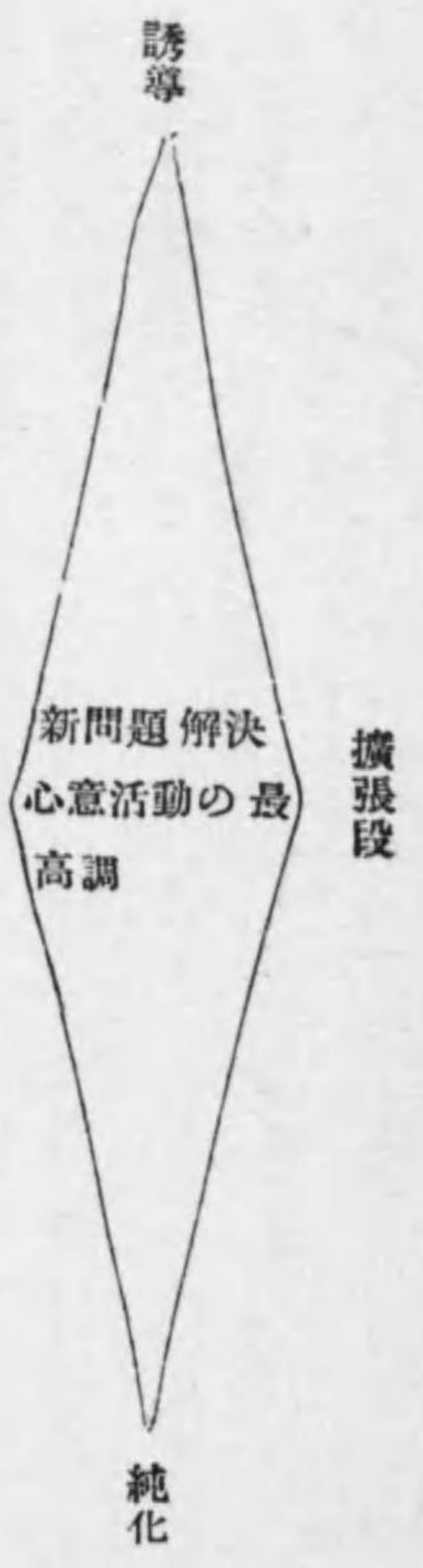
C 動的直観(體驗)への純化
 擴張の段に於て知解に訴へた場合と情操を昂騰した場合とに依つて本段に於ては純化する方法が異なる。

- a 擴張の段に於て情緒的解決法を取つた場合は知的に本段に於て取扱ふ。方法としては
 - 1、表解を作る
 - 2、記録に残す
 - 3、實演
 - 4、年代表 系圖等の製作
 これ等の方法に依つて知識の收得を確實にし記憶に訴へて知性を練磨する。

- b 擴張の段に於て知的解決法を取つた場合は情的に本段に於て取扱ふ。方法としては
 - 1、教師の所感にき、
 - 2、史實の批判を試みる
 - 3、因果の道理
 - 4、現代と比較
 - 5、自己研究結果の反省
 渾然たる一個の氣分を感受することに依つてその情意を刺衝し、或は愛國の心情に燃え、或は實行の氣分に動かされなどして、ともかくもそこに深い何等かの印銘を刻するに至るであらう。これを以て知的より情的への過程である。

◇國史學習指導案(作業化)

- 一 題材 平清盛
- 二 保元、平治兩度の亂に地歩を占め威勢日に盛大となつた平家は榮達の速なるに狎れて早くも驕奢、分を忘れ横暴日に加りしたため他氏の反情を招致した。殊に清盛は勢の盛なるにつれ我儘の振舞が多かつた。此の間に立つてかの温順にして忠孝の心厚き重盛は父清盛の不忠不義なる行を見るに忍びず、勇往諄々として父の振舞を諫められた。本課は此の経緯を明かにし重盛の心情を洞察せしめ且つ重盛の誤らざる正しき行爲を欽慕せしむるにある。



三 學習過程

第一過程 主として兒童獨自研究

- イ、問題の發見
- ロ、問題解決の工夫

- 1 立案
- 2 資料蒐集

ハ、解決に向つての努力

- 1 蒐集につきて
- 2 研究の要點を記録
- 3 問題に對する答案

第二過程 兒童と教師教師と兒童の共同研究

イ、研究結果の表現

- ロ、新問題の發見
 - 1、兒童の獨自研究
 - 2、協同研究………
- ハ、新問題の解決
 - 1、兒童分團にて
 - 2、兒童と教師

第三過程 體驗の純化

- イ、脚本の發表
- ロ、兒童の感想發表
- ハ、綴方に綴る

備考

- 1、時間的推究をなし史實を創造する型を最とする。
- 2、教師先づ史實の生命を體驗する。
- 3、兒童をして歴史的人物の實際的地位にたゞしめたい。

平 重 盛

時代 治承元年五月初夏の或一日の午後(今より七百四十七年昔)
 場所 京都(平安地)
 登場人物 七人

後白河法皇近臣 大納言藤原成親
 第三十六章 國史作業學習の方法

多田藏人源行綱

平判官康頼

西光法師

俊寛法師

大政大臣淨海入道 平 清盛

内大臣近衛 大將 平 重盛

場 數 第一幕 二場

第一場 鹿谷會議の場(俊寛の山莊)靜に開幕。

背景はかきわりにて東山の秀峰をあらはし、山莊の氣分を十分に出し秘密會議をするには好都合の場所なるを思はしむ。人物は登場してゐる。(成親を正面にし行綱、康頼等と左右に居並ぶ。)

成親 (上手正面に座し。) 皆さんおそろひなれば(と一座を見まわす)いつもの軍議に入りませう 皆さん我々は會を重ねる度に一層注意をしなければなりません。さて皆さん我々の素志を貫徹する時機が來ました。そして事を擧げる時には來る六月十六日祇園大祭に會して市中がにぎや

かであります。その時に六波羅なる清盛の館に火をつけ四方より急に攻むれば志をとぐること
むづかしいことはない。私は考へますが皆さんの御考はいかゞですか？

四人 (やゝしばらく考へにふける)

康頼 (靜に口を開く) 熟考いたします。私には別段異論はございません
行綱 …… 妙計でございます。

西光、俊寛 至極妙計でございます。そのときは我々は山徒をつれて出馬いたしませう。

成親 (満足そうに) 行綱殿、貴殿は源氏の嫡流なれば大いに働いて源氏の悪名をそぐのですな
あ、そこでまだ一ヶ月もあればもう一度會して各部署の御相談をいたしませう。(語を改らため
て) 我々の相談もこゝまで來て平氏方に氣づかれるといけませんからいつものやうな酒盛でも
いたして遊びませう。

俊寛 (立ちて上手左の方に退がるやゝありて酒肴の仕度をして持ち出す、成親よりさかづきをくば
り成親よりさしてまはる。)

(このとき下手に當つてときの聲をつくる。その聲に一同驚きかけ出でんとして、かたへ
の酒徳利を倒す。)

成親 (これを見て) あゝ事の始めに瓶子(平氏をさす)が倒れた、これは我々の大望が成就いたす
(と非常に手を打ち喜ぶ)

康頼 (倒れた徳利を取りあげて)倒れた瓶子(平氏)は頸をとつたがよい。(これを持ちてやゝしば
らく舞をなす。)この頸をば獄門にかけん。(といひて柱に結びつける。)

成親、西光、俊寛 (大いに喜び笑ふ)。(行綱ひとり打考へる。)

成親 今日夕方になりたれば平氏の探偵に見つからんやうに歸りませう。

康頼、行綱 歸りませう。

成親 (立ちながら)皆さん、今後は一層注意をいたさう。では御先き御めんなさい。

(會しやくをなして下手へ退場)

康頼 ではそこまで御伴いたしませう。(成親のあとについて立ち、三人つゞいて下手へ退場。西

光、俊寛、行綱の三人送り出す。)

行綱 (成親、康頼を送り出しながら)私がちがえばこゝにて御めんなさい。

三人 (いつたんもとの座に歸る)

行綱 私もおそくなるといけませんからこれにて御めんなさい。(退場、わきへ退場しながら獨語)

いやしくも大敵平氏を滅さんと志す者が、たとひ酒の席上とはいひながら斯く子供にも劣る行
ひをする様では、とても大事はとげられない。又はかりごとに秘密の上には秘密を守るべきで
あるのに。口やかましい小供の居る場所で、平氏が倒れたなど、叫んでは、やがて平家にさと
られて憂目を見るに相違ない。いつそのこと平氏に注進しよう。そうだ。(とかたい決心を顔
にあらはしながら靜に退場。)

——靜に幕——

第二場 六波羅の館 清盛居間(幕を開ける)

清盛 (腹巻「袖のない鎧」を着けてその上に法衣を着け鎧の金物が衣の間より出づるを氣にしながら座す。重盛は烏帽子、直衣といふ姿にて、清盛より斜下手(左)へ座す。

重盛 (清盛の様子をじつと見ながら) お父上、今日は何事でごさる。今次の間にて弟宗盛が一大
事でごさる。なぜお兄上は甲冑を召さないかと問ふ故に、私は一體何處に朝敵が居るか、兄は
朝敵を征伐する時より外は甲冑を着ませんといふて來たのですが、お父上朝敵が出現いたしま
したか?

清盛 (胸の金物が出るのを氣にしながら聲あらあらしく) 鹿谷の變を察するに、成親等は末で其
の本は法皇にある、よつて一時世を鎮めんために、法皇を御所の一間に移し奉る所存である。

かゝる大事のある時なぞ遅参いたしたか？

重盛 (涙を流し暫く、物をも言はず、稍々あつて涙を拭ひながら) 今父上の御姿を見て、平家の運が衰へかけたと思ひます。前日にも御諫言申し上げたのにまだ御怒りがおしづまりにならないのでございますか。重盛が聞く所によれば世に四恩あると、その中で君の御恩が最も重いといひます。此の恩を知らぬものは鳥やけだものでございます。わが家は桓武天皇の御末なれども一旦下つて人臣となり、中頃甚だ衰へたりしに父上に及んで榮達をきはめたまひ、われ等がおろかなるものも高き官位をいたゞきをるは、これ皆君の御恩なり。今この御恩を忘れて皇威をかるんじたてまつらば、神罰たちまちいたりて一族日ならずして亡ぶべし。父上聞入れたまはずば重盛兵をひきゐて法皇を守りたてまつるべし。父上にてむかひせんもまた忍びがたし必ず、此の御企をとげんと思召さば、先づ重盛が首をはねられよ、そして後になされよ。

清盛 (はじめの勢はなく) かやうなことを思立つたのも我が身のためでなくて、子孫の安穩を願ふからである。しかし道理に背くといふ其方よきにとりはからへよ。(と曰ひて奥の一間へ退る。上手から)

重盛 (これを見送りながらしばし涙にくれる。)

—— 靜に幕 ——

次ぎに掲げた「坂上田村麻呂」も「藤原鎌足」も皆實際指導にあたり協同創作したものを更に一部教師が手を加へてやつて、試演したものである。

坂上田村麻呂

時代 平安朝初期

場所 京都

登場人物

町人 一人

田舎者 一人

宮人 五人(甲、乙、丙、丁、戊)

坂上田村麻呂

坂上田村麻呂の大將分 四、五人

第一場

舞臺 はるか木の間、皇居の瓦と白壁とを見せる。

第三十六章 國史作業學習の方法

田舎者 登場（あたりをみまはしておちつかぬ體に）

町人（用事ありげに急ぎ足にて登場して田舎者の前をすぎんとする時）

田舎者（なにか思ひ付きたる如く町人を呼び止む。）あゝもしく一體此處はなんといふ所ですか。向ふに見える白壁造りのやかたはどなたのお住ひですか。

町人 あゝあれですか、あれは帝様の御所で三年前に奈良からこゝへ都をおうつしになつたのです。

田舎者（感歎せる體に）あゝさうですか、すこしも知らなかつた。奈良の都も非常によかつたといふのにどうして此處へおうつりになつたのでせう。

町人 なんでも非常に地の利がよいのでお遷しになつたのださうです。まあ、ごらんなさい。（町人指す。田舎者指された方を見る。）東に見えるは東山で、西に見えるのはあたご山で、北に見えるのは比叡山で三方山にかこまれてゐるので、自然の城ともいふべき地形を具へてゐるので都とするに非常によいために遷しになつたのです。故に民の四方より集つて來て今では、安らかに暮して行くことが出来るので我々民は平安京といふて居ります。

田舎者 御親切に有難うございました、よくわかりました。

町人 いえどういたしまして。急いで退場す）

田舎者 あゝ實になにを見てもゆつたりとした氣持がする。（靜に退場）

（やがて大宮人甲、乙語りつゝ登場）

大宮人甲 此の頃又東北地方の蝦夷どもがさわいでゐるので帝様は非常に御心配なされてゐる。なにしろ先きにもいくたりか名將軍が征伐に行つたのが其の時かぎりですぐに又さはぎ立てるのであるから今度こそは二度と再びさはがんやうにしなければならぬから、今日も御使者が名將軍をさがしに四方へ出かけられたがうまく名將軍は見付かつたかどうか。

大宮人乙 まだ御存じないのですか、それあの坂上田村麻呂といふ人を征夷大將軍にお選びになつたさうです。

大宮人甲 なに坂上田村麻呂があの方であればきつと蝦夷を征伐するでせう。

大宮人乙 あの方は非常に武勇に勝れてをられ、又情け深く怒れば猛獸も恐れるといふ話ですから蝦夷征伐の大將として適當の人です。

大宮人甲 なにしろ名將軍だ。（以上の事は二人歩きながら語るそして靜に退場）

第二場（軍評議の場）

上段の間に田村麻呂、左右に將星四、五人居竝ぶ。

田村麻呂 この度陛下の命をお受けして東北地方の蝦夷どもを征伐に行くのである。一同のものに大いに働いてもらひたい。

一同 承知しました。(おじぎをする)

田村麻呂 ついては軍を進める上に手落ちがあつてはならぬから一同の者に集つてもらつたわけである。余の意見をよく聞くやうに。

一同 はつ。(おじぎをする)

田村麻呂 (東北地方の地圖を示しつゝ) 軍は多賀城、秋田城、膽澤城、志波城と進めて賊を討つて再び叛かんやうにしたいのである。若し異論があれば遠慮なく申せよ。

一同 (やゝしばらく考へる。) 異論はございません。

田村麻呂 異論がなければ明後日出達いたすにつき一同出達の準備をいたすやう。今日は御苦勞であつた。もうひきとつてもよろしい。

一同 はつ。(おじぎをして退場)

田村麻呂 (雄々と立ちあがりて語氣に力を入れて) 此の度の征伐に依つて皇威は益々東方に擴張

する。どれ御機嫌伺ひに出仕しやう。(退場)

第三場

舞臺 (第一場と同じ)

大宮人丙 田村麻呂將軍が出達してからもう三月位になるなあ。

大宮人丁 さうもうそろ／＼戦の様子がわかるはずだが。

大宮人戊 (登場、大變うれしさを顔。獨語) 天子の御威光もだん／＼と東北の方へのびて行く誠
にめでたい。

大宮人丙 (振り返り戊を見て) やあ君は今「誠にめでたい」といはれたがなにがめでたいのだ。

大宮人戊 (丙、丁、を見ながら) 御兩人はまだ知らないのか。

大宮人丙 丁、何にを。

大宮人戊 では話そうか！ 今より三月前に坂上田村麻呂將軍が東北地方へ蝦夷共を征伐に出達されたことをわすれはしないだらうね。

大宮人丙、丁 あゝわすれはしない。(丙が下のを云ふ) そのことについて今も二人で話しをしながら來たのさ。

大宮人丁 では戦の様子がわかつたのかね、

大宮人戊 戦の様子はわかつたともく大勝利さ。あの將軍の武勇智謀を以つては如何なる賊といへども討ち従がへられないことはあるまい。

大宮人丁 しかし非常な困難であつたらうな。

大宮人戊 道とでもない山ばかりのところださうであるから。

大宮人丙 しかし大勝利でうれしい、帝様はどんなに御喜びであらう。これからは賊共は再び叛くことはなくなるだらう。

大宮人戊 我々は大いに御祝ひを申し上げねばならぬ。

大宮人丁 私は早くかへつて友達に話してやらう。すこしも早くではさやうなら。

大宮人丙 私も。

大宮人戊 私もでは大いに御祝ひしやう、さやうなら。

藤原鎌足

時代 皇極天皇 四年春の始め頃

場所 大和

登場人物

中大兄皇子

藤原鎌足

蘇我石川麿

佐伯子麿

葛城稚火養網田

皇子の従者二三名

第一場 法興寺の蹴鞠會の一場面

中大兄皇子左足にて立ち、かたわらに鞠あり。従者あたりの草叢のそこゝを探す。

鎌足 (片方の靴を持ちて登場) 殿下、これは殿下の御靴ではございませんか。(ひさまづいてうやうやくしくさげろ。)

皇子 (鎌足を見て) 鎌足なるか、その靴は余のであるぞ、よくさがしてくれた。(皇子ひさまづいてこれを受く) 鎌足汝は蹴鞠はすきか? すきならば蹴つて遊ばんか?

鎌足 は、つ有難き幸せでございますが、師が病にて今日にも知れぬ次第なれば（心配さうな顔をする）今日はこれにて失禮仕ります。

皇子 （鎌足の顔をじつと見ながら）師とは誰なるぞ。

鎌足 師とは南淵請安のことでございます。

皇子 （鎌足が請安と言ふを聞きせきこみかげんに）請安が病とな、請安は我が師である。いつ頃よりか？ 我のところ用事繁多につき、こゝ五六日行かなかつた、それ故少しも師の病を知らなかつた。汝はこれより早く師の許に参るやう。我もあとより服装をなほして参る、少しも早く。

鎌足 仰せに従ひて。（敬禮して退場、皇子あとより退場。）

第二場 請安宅の場

上手に皇子の座を設け、鎌足下手に座す。しばらくして皇子登場座につく。

鎌足平伏す。

皇子 （心配さうに）鎌足師の病はいかゞなるぞ。早く案内いたせ。

鎌足 は、つ。（一寸頭を舉げて、又平伏す。）

皇子 （せきこみかげんに）鎌足はやう案内せよ。

鎌足 （無言のまゝ平伏。）

皇子 鎌足、汝、無言であるところより察するに師は御他界なされたか、いかに、心配なるぞ。

鎌足 （おそる／＼頭を舉げる）殿下には我が言を御信用なされて師請安は病の床に伏すものと思はれ、非常な御心配の御様子を見ては、鎌足何と申し上げてよろしきや其の言葉に苦しむものであります。實は私が殿下に師病に伏すと申し上げたのは偽りにて、

皇子 （怒りたる様子にて）なに偽りとな、この無禮者め、成敗いたす。そこ動くな。（腰の劔に手をかく）

鎌足 （びつくりして）暫くの間、御猶豫下さるやう、御願ひでございます。

皇子 汝の言葉聞く耳持たぬ。

鎌足 暫くの間何とぞ、私が殿下をいつはりてこゝへ御出でを願ひましたるには、深き考へがござればなり。（語氣に力を入れて）今朝廷の御様子を見奉るに、天皇の御位、其の他一切のことは皆蘇我氏のために左右されて居るやうでございます。私が今さう申し上げるまでもなく、殿下には御聰明にいらせられる故、つまびらかには申し上げませんが、私は蘇我氏を討滅せんと考

へて居ります。

皇子 (深き考へに入る) 汝の申すところ實である。我もそれについては深く考へて居つたのである。一日も早く蘇我氏を仆して政治を改革いたさんとする考である。

鎌足 私は以前よりこのことを申し上げんものと思ひをれども殿下とお近づきいたすことが出来ざる故に私の考へを申し上げずに居つた次第でございます。私は一日増しに朝威を恐れず、皇族方をなやめ奉ることを見、又聖徳太子の御女が仰せられたるに「天に二つの日なく、地に二人の君なきに、いかで我儘な振舞をするぞ」との御言葉を聞いてはおちついてはをられません。

皇子 鎌足、しかし二人だけではこの事は實行するに困難であるぞ。汝によき考へはないか。

鎌足 そのことは私におまかせくださるやう。

皇子 しかば汝によろしくたのみおくぞ。

鎌足 は、いつ、きつとしつかりしたる人物を探しますれば、御安心下さるやう。

皇子 その言葉をきいて安心せり。師には後日又御目にかゝるとして、本日はこれにて歸館せむ。

(退場)

鎌足 ではそこまで御見送りいたしませう。

第三場 鎌足宅の場

上手に皇子の設け、鎌足始め同志三名、皇子のお出を待つ、皇子従者もつれずに、しのびに御出でます。鎌足等御出迎ひ申し上げ。

皇子 (設けの座に着きながら) 鎌足、それなるは同志のものなるか。

鎌足 (三人を見ながら) 左様でございます。

皇子 左様か。三人のもの共、朝廷のために忠義をつくすやうに。

三人 我等一命を捨て、朝廷の御ためにつくす考へにございます。

皇子 (御きげんよく) しつかりたのみぞ。(鎌足に向ひ) 鎌足、我等の大使を成就する時は定まつ

たぞ、来る六月三日、三韓より貢物を捧ぐる日を期して、大極殿に於て決行致さん。

鎌足 その日の手配はいかやうになさる考へにござりますか。

皇子 手配の儀はいまだ時日もあることなればそのことは後日にのばさん。しかし其の日には蘇我氏を一人残らず亡ぼしたいのである。

——幕——

次ぎの「井伊直弼」は全然尋六の某女生が創作したものであり、又尋六の女生が試演したもので

ある。参考のため掲げることとする。

井伊直弼（其一）

時 徳川時代の末頃

場所 久里濱の濱へ

人物 前の村民 五、六人。後の村民 七、八人。前の村民甲の子。

おつぎ。(十二三歳) 役人一人

波打ぎわのそばに一本の松の木がある。一面砂原で、中央に一つの大つりがねがふせてある。そのまはりで村民五六人、つりがねをたく棒を持つて話をしてゐる。

村民甲 何しても大變だ。お役人の話によりやあ、きのふの夕方あの黒船とやらがすがたを見せたさうだからな。

村民乙 ほんとに今はかくれてゐるやうなものな。

村民丙 あいつがいつ出てくるやらわからないんだから。

——かういひながらまゆをひそめて、海の方を見る。この時下てより、やあい／＼とかけ

ごろがきこえて来て、村民七、八人二つのつりがねをひつばつて登場——。

前の村民一同 これで用意がとゝのつたから、少しは安心だ。まあ、一服。

後の村民甲 おやく／＼皆おそろひで……、こんな大つりがねがな、もう五つも山の上にすはりましてぞ。こゝにもこれで二つだから合はせて七ツ！アハ、ハ、ハ、。

前の村民乙 うん、なんぼの黒船だつて、こんな大きなものがいくつもありやあ、ふるへ上つてにげて行くべえ、ハ、ハ、ハ、。

後の村民丙 だけど、これでもつてにげて行かなかつたらどうしべえ、あ／＼／＼今の世がおそろしい。そして太平の昔がなつかしいや、なあ、皆の衆。

一同 ——うん——。(かすかに答へ考へこむ。)

松の木、風にゆれる。

役人一人上手より登場。

役人 お／＼はこべたな。御苦勞御苦勞。

言ひながら心配げに下手より退場。すれちがひに、村民甲の子「おつぎ」かけ足に出てくる。村民甲にだきつき、

おつぎ お父ちゃん黒船おつかない。母ちゃんは、ないてるのー早く、お家へ、かへつておくれ、よう。

村民甲 おゝ、今ゆくぞ。(なみだぐむ。)

おつぎ ……。(すゝりなく。)

皆いちらしげにそのありさまを見る。夕日が海のかなたへしづかにおちる。波の音、しづかにきこえて、

—幕—

井伊直弼 (其二)

時 春のよひ、安政五年。

場所 直弼の居間。上手に廊下のはしとにはが見える。正面にうつくしきから紙ある。

人物 井伊直弼。小姓(十二三歳位)。

まくあくど直弼中央の高き所にすはり、ひちつきによつて何事か考へて居る少時沈黙。上手の廊下をつたひて小姓一人書面をたづさへて登場。直弼の前に來りかしこまつて差出す。直弼だまつて受取り手紙を開く。讀んで行くうちに、顔色青くなり、手ふるへる。や

ゝあつて、

「あゝどうしたものであらう。京の天皇のみゆるしは未だ下らない。さらばとて、彼の國よりはこのやうに。」

といつて讀んでゐた手紙をばにぎりしめる。

その間に小姓黙禮して退場。

直弼くるはしげにうつぶしてしまふ。

そばにある銀燭のあかりかすかにゆれ、にはの夜櫻がちらくちつてくる。

—しづかに幕しまる—

井伊直弼 (其三)

時 冬の日、安政五年

場所 村の通り。

人物 村の人達大勢。

多くの人達わい／＼いつてゐる所でまくあく。

甲 井伊様のやつた事はわるい。たしかにわるい。

乙 うん、第一天子様に御相談しないなんて――、
丙 そうだく。井伊のやらうは不忠な人間だ！。
乙 水戸様たちをあんな目にあはせたといふ事も悪い。
なほさわいでゐる所で舞臺まわる。

時 萬延元年三月三日

場所 櫻田門外

人物 志士十八名

雪がちら／＼ふつてゐる。志士十八人の者が天をふしおがんでゐる。

志士一同 君のために、主のために、我等は死ぬ。神、何とぞしゆびよく彼の首がとれるやう、おまもり下さい。

とさけんで手をあはせる。

この時遠くの方で下に／＼といふ聲が聞えてくる。

志士たちはいそいで三ヶ所にわかれてかくれる。

雪はなほふりしきつてゐる。

——幕——

第三十七章 國史學習指導の實際

尋常科第五學年

教材 第十、和氣清麻呂

目的 佛教興隆の我が國情に對しての利害關係を研究し、清麻呂の誠忠なる人格と行爲とを具體的な行動の上に礎き以てその眞意を偲ばせたい。

學習過程

一 史實の研究（時代の觀念を明確にして）

參考資料として、

兒童讀物、歴史參考物、教科書、繪畫。

二 史實生活の擴充（勞作體驗として）

劇作學習——歴史の創造生活より觀念の收得及び法則の發見。

第三十七章 國史學習指導の實際

三 同前

脚本發表
實演發表 } 個人及び共働的な勞作生産

備考

- 一、時間的過程に於ける意味を求め、その時代の特質に充分觸れしめ以て實感明な自己收得たることを發見し創造せしめなければならぬ。
- 二、教師が史實の生命をすつかり握り、然して生命の充分な内的直觀の働きを起させなければならぬ。
- 三、現像を確實にした上に相當な意味付けてなし主觀的な評價を産み出さなければならぬ。兒童として歴史中の人物の實際地位に立たしめなければならぬ。

脚本例 (兒童作品)

和氣清麻呂

時代 奈良時代 (稱徳天皇の御代)
場所 奈良平城京内裏
登場人物 天皇。弓削道鏡。その他侍臣五六人。和氣清麻呂。天皇近臣二名。

場數 一幕二場

第一場

開幕 道鏡下座に微笑しつゝ座してゐる。間。

天皇登場上座に着く。

天皇 汝が今日改めて頼みとは何事なるぞ。

道鏡 はゝあ。今日のお頼みとは餘の儀にあらず、彼の太宰府の神官中臣阿曾麻呂といへる者、宇佐八幡よりの神託に「我そして帝位に即かしめ給はゞ、此の世は無事泰平に候ふべし」との事一應上聞に達すべしと存じ今日かくまかりこした次第に候

天皇 (沈黙やゝあつて) そは事輕からず、宇佐八幡に勅使を立てゝ今一應神勅を仰ぐべし。

道鏡 (不平顔にて) その儀、眞に然るべく候はん、さらばよきやうにお取計ひ御願ひ申し候。

天皇 (近臣に向ひ) 誰か清麻呂を呼んで來れ。……(場面やゝ寂たり)(近臣の一人清麻呂をつれ登場)

清麻呂 (かしこまつて) わざく御呼立ての儀何事に御座候、某に出来る御用ならば何なりとも仰せつけ下され候へ。

天皇 今汝を呼び出したるは餘の儀にあらず、朕昨今奇しき夢を見たり、八幡大神の使來りて汝が姉廣蟲を宇佐に使せしめよと告げぬ。朕之に答へて廣蟲は體弱くして遠旅に堪へ難ければ其の弟清麻呂を以て代らしめんと云ひたり。汝急ぎ行き神教を請ひ來たれ。

清麻呂 は、つ。有難き御言葉、清麻呂身に餘る光榮と存じ候。これより直ちに參り候故御安神下され度候。

天皇 其言葉で安心せり、さらば早くするがよいぞ。

(天皇退場。清麻呂續いて出でんとするを道鏡呼び止めて、)

道鏡 宇佐の大神、我を天位に登らしめん御心ありと聞けば、此度の使命、汝能く能く其の旨を心得て返奏せよ。我若し天位につかば汝に高き官位を授け、天下の政をとらしむべし。若し事を妨ぐればこれなるぞ。(劍を指して威す) 其の覺悟をして確と神託を請ひ來れ。

清麻呂 心得て候。(と一言の答を残して退場)

第二場 前と同じ場面

天皇上座、道鏡其他下座、清麻呂靜かに登場す。

道鏡 (膝を進めて) 神勅如何ありしぞ、疾くそれにて申し候へ。

清麻呂 (徐に面をあげ) 我が國は國の初めより君臣の分固く定まれり、されば未だ臣をもつて君とせし例あらず、我が天津日嗣は必らず皇統を以てすべし。道鏡は何者だ。敢て神勅を偽り天下をとらんとする者なり、其の罪許すべからず、速かに之を除くべし。神勅の趣き此の如くに候。

道鏡 (清麻呂を睨めつけ) 黙れ清麻呂、汝己れの心を以てみだりに神託を偽る者なり、場所柄をも辨へざる無禮者、誰ぞある疾く清麻呂奴を死罪に行へよ。

天皇 (清麻呂に向ひ) 使者の役御苦勞に存する。(更らに道鏡に向ひ) これ道鏡はやまるな、例へ清麻呂神託を偽る者とも死罪とは如何に、(とそのまま立ちて入御す)

道鏡 (無念さうに) 汝死罪になさんと欲すれども、特別の扱ひを以て、これより遠島申しつくる左様心得てよからう、尙汝の姉廣蟲もやはり遠島を申しつくる。

清麻呂 (姉も遠島と聞き驚いて) 弓削殿、某は死罪もよろしきが、姉に何んで、とががありませんや、其の儀は平に御許し下され度候。

道鏡 だまれ、汝神託を偽りたる者に何の言譯があらうぞ、某のすること有難く心得ろ、者共清麻呂をつれて行け。百官皆怖れて誰一人清麻呂をつれ行かんとする者なし。

道鏡 誰もつれて行かなければ某がつれ行く、早く立上れ。(清麻呂をつれて立ち去る)
後は淋しく感に打たれてシンとする間に幕。

尋常科第六學年

教材 大石良雄

目的 大石良雄の盡忠義烈なる人格を了解させ、當時の逸樂華美にして藝術的享樂的の元祿時世と如何なる内面的關聯を有するかを兒童の學習勞作研究に訴へて體得せしめたいのである。

準備 元祿時代の藝術品及化藝品、良雄の肖像畫、四十七士討入圖及び其他義士關係の寫眞繪葉書等、義士浪花節レコード(樂燕)兒童の家庭よりの參考物等

過程

- 一 研究勞作への志向。
忠臣藏、由良之助、高輪泉岳寺等の既得事項より彼等の研究志向を促す。
- 二 研究資料の展覽により自己の研究方向に資すべき物を捉へ且つ或る暗示を與へる。そこで獨自學習の勞作的想定を決定發表せしむ。

三 研究 (獨自、相互、教師共働)

時代と當時の政治、

元祿年間、五代綱吉、

學問の獎勵が産んで柔弱、

其の他、

2 良雄生立ち、

少年時代——山鹿の兵學

青年時代——伊藤の漢學 } 文武の道、

3 淺野藩の變事、

城代就任中、

殿中松の廊下の場と其の原因、

當時の官紀につきて、

4 良雄以下の仇討の決心と苦心、

赤穂城大評定の場——論議騒然、

良雄の考へ、

「主家の再興を計り成らざれば仇討、」

山科閑居、

東下り、

良雄等の忠節（討入準備の面々、武藏新田の義士隠家の話を郷土材料として）

討入（元祿十五年十二月十四日）の場

本校義士會の話、

泉岳寺引揚の場——自首、

5 義士への輿論と幕府、

一、命乞ひ、武家法度、泉岳寺にかへる、

二、吉良家の斷絶、

三、後世人の敬慕、

6 兒童の研究につれて順次補説を加へ蒐集参考物を提示して仕事を進める。

四 劇的表現により研究勞作を具體的に演ぜしめ了得體驗せしむ。

實感を捕へる。

自己收得の表現。

史實の眞相と脚本。

五 課外作業。

大石家系圖。

良雄の肖像製作（繪畫、彫刻等）

泉岳寺參詣

武藏新田義士隠家舊跡視察

本校生活科

義士會（本校年中行事）

高等科第一學年

教材 第十、律令の制定

準備 年表、掛圖、律令制定表、歴史附圖、參考書類、和歌、博物館所藏品の繪葉書等、

目的 大化の改新による當時の世相の急進化と、それに適合せる律令の内容を了得せしめ、同時に世相進化に伴ひて改修せられ行く律令とその時代相とを相關的に理解せんが爲めの勞作

研究を重んじ、その所産物より歸納的に外來文化の日本化する過程を發見せしめんとするに在り。

過程 (勞作研究を主體とする)

一 既得體驗の想起により勞作學習慾を喚起する。

1 上古の社會組織と現今の社會組織との比較。

2 學問、佛教の傳來が與へた我國當時の思想界。

3 聖德太子の社會改造の計劃目的。

4 大化の改新の世相に及ぼした結果。

5 當時の時代思潮の再確認。

二 教科書通讀によりその價值を想定せしめ自發的勞作研究に入る。(第一次の作業)

1 大化改新後の政治充實の史的直觀。

2 律令の内容及び其の變遷による史的直觀。

3 律令存續の史的直觀。

此の事實により次の研究は自ら産み出されなければならぬ様な指導を計劃する。

三 獨自研究——相互研究——教師共働の研究。

1 各自の自由研究。

2 然して問題の構成へ。

3 問題の研究勞作より。

4 問題の研究作業へ。

5 各自の研究發表により。

6 相互學習作業を展開し。

7 教師の補説を加へ批判されて全くの解決點に至る。

四 本質直觀。

研究の爲め幾多分解せられた教材は左の要項によりて整理されるのである。

因果關係。

時代思潮。

外來文化の影響。

律令存續表、年表の活用。

第三十七章 國史學習指導の實際

次の生活奈良時代に對する研究慾をこの間に於て刺戟する必要がある。
課外作業として、(次の奈良時代にかけて行ふ)小倉百人一首の製作及び遊戯を課して和歌の方面より當時の世相を追慕せしめ併せて歴史文學の趣味の向上を計らんとす。

等高科第二學年

教材 第四十、江戸幕府の衰運

目的 江戸幕府の中興の治としての吉宗の明快なる手腕ありて以後の、各將軍の時代に於ける、時代文化の各相を彼等の自發的な勞作研究によりて體得せしめ其の人々の時代個性の内面的關聯が、やがて時間的に流動し交渉しつゝ、江戸幕府の外面的な全盛時代、刹那的享樂時代等を生み出し、藝術的解脫に現實を忘れた生活は、經濟的にも將又政治的にも最も危険なる時代個性を醸成しつゝ家慶に至つた衰運の極致そのものでありし事實に迄總體的な體験生活をさせたいのである。従つてその勞作中より時代流轉に於ける相對する原則の發見は當然生み出されなければならぬ自己收得である。

學習過程

一 個々の資料を蒐集し、綜合的な構造關聯をつくる。(獨自的立場の尊重)

二 その構造に對して中心觀念としての類型を暗示する。然して個々の事實との關聯を眺めて見る。(共働的立場の尊重)

三 且つ他の類型も亦併せ課して共に了解に進む勞作研究の作業體験をなす。

第一時、第二時

- 一 吉宗中興の治としての主要方向につきての問題提示。(既習事項)
- 二 吉宗の徳を繼續する人がなかつた時には如何に幕府はなるか。(原則の發見)
- 三 衰運の意味の研究に迄自發的な體験要求が進められる暗示。
- 四 即ち次の將軍の政治を調べる必要が彼等の頭の中に構成せられる。
- 五 參考資料の蒐集。(個性的作業)
- 六 綜合的反省として。(研究目當)
誰將軍から誰迄の時代の事か。

九代時代の様子は。

十代時代は。

十一代時代は。

十二代時代は。

次ぎ次ぎに調べて見やう。

七 家重——家治時代の理解。

獨自研究より共働的解決へ。

中心點——家重時代は太平。

——家治時代は悪政と天災。

八 家齊時代の理解。

同様の方法で、

中心點——定信時代、寛政の治。

——文化、文政の極盛。(具體的事實)

——華奢遊興と飢饉。

第三時

一 家慶時代の理解。

獨自研究の發表より共働解決へ。

中心點——家慶暗弱——水野忠邦の改革、幕府衰亡の兆。

二 総合的反省生活。

研究物の整理。

三 幕府衰亡に至る系統的事實の表解作製。

四 繪畫其の他文藝作品の鑑賞生活。

参考物展覽により、何物かの發見に迄指導する。

備考

一、將軍系譜年表の作製。

二、劇化作業、脚本創作、試演(個性的)

三、特殊な研究調査物の作製獎勵。

第三十八章 理科の本質

理科教育の目的は、自然科学本來の目的と、自然科学の發達過程との兩方面を通觀し且つ他の對立的諸問題たる藝術、道德、宗教との調和的發達を顧慮することによつて初めて決定せらるべきである。

殊に自然科学は理科教育の母體であり、本質的には實に異體同心の關係にあるのである。現代の物質文明が驚異的發達を遂げるに至つたのは實に最近自然科学の進歩に負ふものであることは云ふまでもない。

しかしながら、それ故に理科教育は、直ちに以つてこの物質文明を理解し、利用し享樂する爲めのものであるとみることはあまりに淺薄な皮相的見解である。

理科教育はもとより直接には物質を取扱ふものではあるが、その奥底には實に文化——精神的、物質的、即ち謂ふ所の精神的文化教育に參與すべき使命を有するものである。

故に最も教育的に考へられた本科の教育は人格全體の教養に資し、他教科の爲し得ざる形に於いて、科學、藝術、道德、宗教、即ち眞、善、美、聖等の理想的價値に關係して居るのである。そして本科はその極致として自然に對する驚異と敬虔の念を惹起せしめ宗教的情操の涵養に多大なる貢獻をなすものであることは特に留意すべき點である。

今本科の目的を分析的に考究してみると、第一の目的は自然の內的調和の認識である。

抑も吾人の限りなき經驗世界の中から共通の要素を抽象して普遍的概念を以て之を如し、かゝる概念によつて經驗を單純し、普遍要素の普遍的、必然的關係を表す普遍化的の作用が所謂科學的認識である。今まで複雑混沌たるものと思はれた自然がこの必然的即ち因果關係によつて統一整然たるものとなつて吾人の前に立歸つて來るのである。故に自然科学の認識は個性的のものではなくあくまでも普遍的であるところにその特徴があり價値があるのである。

従つて科學はつまり科學の爲めの科學であつて、その理想とする所は必然的、絶對的、普遍的であるところの自然の眞を探究するものであつて、人生に齎す利益幸福の如何を豫想しての仕事ではないことになる。即ち純正科學の目的は統一普遍的知識の構成がその目的である。

この純正科學の目的、即ち自然科学の本質的目的を達するには如何なる點に着眼すべきかといふ

に、それは、科學的研究法を正しく理解せしむるにある。科學的研究法といふと教授上に關係するのではあるが、こゝに云ふ科學的研究法といふのは研究の方法そのもの、理解と、研究せしむることとの二つを指すのである。

かくして通常の天然物及自然現象が正しく彼等に理解せられて行けばよいのである。

眞理を認識する爲には幾多の困難と最大の努力とを要するものであるが、その努力と進歩とに價値感を起させてやると同時に精密公平にして常に知力的正直を保れたる觀察は自然科學の出發點であり、これが練磨は科學的訓練の基礎であることを念頭に置いて、終始精密なる觀察力の養成に努めねばならぬ。

要するに自然の眞理を捉へることは自然を人間の能力によつて概念化すること、即ち概念的知識を興へる事のみによつて眞理をつかみ得ると信ずる誤謬を恐れてゐるのである。單に概念的知識を以つて眞理が認められたわけではなく、物質とか、エネルギーとか云ふ概念そのものが自然であると考へることは甚しい誤である。宏大なる現實の自然を眞實に諦觀することによつて始めて眞實の自然が見られ、そこに所謂內的調和を認識し得るわけである。

第二には科學を現實的に見るときに、應用といふことが輕視出來ぬ重大なる使命をなすこと、即

ち科學の應用方面の重視に就いての問題である。

元來科學は人間の生産物である以上人間の生活的興味と沒交渉であり得ないのであると同時に生活の改善が動機となつて研究の緒を求むることも否定出來ない。

然らばこの科學の應用的方面を理科教育の立場から如何に意味づけたらよいかといふに一言以つてこれを掩へば、兒童自身と自然との相互關係に意味の世界を構成せしむるにある。換言すれば彼等の興味と努力とによつて得られたものが彼等獨特の利用となり彼等の生活改善でありたいと思ふのである。現代の科學的生産物を理解し利用する範圍に止らず、現代文明の生産物を基礎として將來の社會の改造に資する。より進歩せるものをしての發明發見をも考ふべきであるが、これもやはり兒童の將來に掛けた念願の一つであること勿論である。

第三は本科が人格全體の教養に貢獻することに關する事項である。

所謂善、美、聖、即ち道德、藝術、宗教といふ方面と科學との關係については、これ等の一々を本質的に論及した後でなければ容易に結論を下すわけには行かないのであるが、觀察實驗等の直接經驗により事物の實感を得しむることによつて宏壯、雄大である自然の美を觀賞せしめること。吾人の生活の絶對的保證、宇宙構成の權威は自然の善であり、自然に生くることゝは即ち萬物の共存であ

ること。自然と児童との間に強い愛の交流が行はれ、自然の統一調和を理解することによつて人類の位置を知り人類愛より自然愛にまで及し、之によつて正しき信仰に進むの緒を求め、以つて全人生に對して徹底せる光明と希望とを與へること等はこゝに概括的に斷定してもよいところだらうと思ふ。

以上これを要するに、理科の本質的使命は、自然科学を背景として、統一普遍的の理論的自然觀の構成を目標として、自然界に對する驚異、共鳴、觀賞、感激、生存、利用をなさしむるにあると云ふべきであらう。

以上の諸事項を顧慮してそこに選擇せらるべき本科の教材は如何の種類のものであらうか。云ふまでもなく一般に教材は教育上の主觀的要求と客觀的要求との兩方面を考慮して選擇せらるべきものであるが、本科に於いては自然科学本來の立場を考へると同時に、児童の具體的經驗的知識に同化すべき性質のものより行はねばならない。

左に本科教材選擇上の條件を列舉してみると、

- 一、地方的色彩の濃厚なもの
- 二、児童の心理的生理的發達段階に適應し彼等の生活過程を充實すべく比較的興味あるもの

三、少數規範的にして深く進み得るもの、即ち空間量、時間量、物質量に關する基本的觀念を養ふべき基本的教材たるべきもの

四、現在の生活中より將來の物質文化發達の永久的中心點となるべきもの

五、科學の發達史を概觀せしむるに足るもの

即ち吾人が自然科学に對する最も深き理解とその正しさを判斷することは現在の理解に對する論理の正確さを吟味することになると共に、嘗てその昔立てられた理解の不正確の理由も吟味せられなくてはならない。さうすることによつて始めて現世の妥當性を確認することが出来るのである。

そこで發明發見物語や、科學者の傳記や生物進化、生存競争、物質勢力の不滅等の正しき世界觀を與へ得るやうのものが必要となるわけである。

第三十九章 勞作々業と理科

小學校に於て課すところの理科そのものも、勿論科學としての理科である。然かも自然科學としての理科である。教科としての理科が自然科學としての理科であるから、教材に於て自然科學的教材であることは云ふまでもない。この自然科學としての理科その物は、これが研究學習するにあつては必然的に兒童の觀察實驗によらなければならぬものである。

即ち吾々の生命的事實が自然界因果の世界たる外界に向つて進む場合が自然科學の對象となり、精神界自由の世界たる内界に向つて進む場合は精神科學の對象である。後者は吾々の内的經驗、即ち反省によつて直接に與へられ、それから後外的自然過程を機縁として成立つ世界、直接に與へられる世界であり、其材料は體驗によつて成立するものである。前者は感官によつて吾々に與へられる材料を思惟によつて結合する事によつて成立した世界であり、外的經驗、即ち感官によつて與へられる感覺の世界である。こゝに精神科學の立場と自然科學の立場とが區別せられる。

かくて自然科學は外的經驗感覺の世界に屬するもので、感覺を通じて我々の精神界に入るに及んで、關聯をあたへる手段として思惟といふ假説によつて、これを統一して行くのである。

かく自然科學は精神科學と性質が異つてゐるから研究の出發點も研究の方法も當然異なるべきである。即ち研究の出發點に於ては、實在から非合理性を省く研究をするもので特殊から普遍に具體から抽象へと進むものである。

第一節 自然科學的認識の一般過程

理科その物が自然科學であり自然科學的教材の學習である限りに於て、その學習方法は自然科學的認識の方法によるべきものである。この方法によるところに、理科の學習の正しき方法即ち本道としての作業的方法と結合するものである。かゝる認識に於ける一般の過程を考へて見ることにする。

即ち漠然たるところの直觀に始まり、概念的法則を通じて明瞭なる直觀を構成することがその一般過程である。即ち直觀から假説を通じ概念法則に達し、ひるがへつて法則概念によつて個別を残りなく説明し、個別と一般との必然的聯關を定立するに至るのである。前者は特殊點をとつて一定

の概念法則を作つて行く方法であつて歸納的法であり、後者は原理の應用を目的とする方法であつて演繹的法である。兩者は離れたる獨立の過程ではなくて、一般と個物との必然的なる演繹的聯關を豫想し、演繹法を豫想して成立する。個物から何の豫想なしに一般に進むのではない。必らずや一步々必然的に聯關に着眼し演繹的推究を行はねばならぬ。この意味に於てのみ教授は歸納的であるといへるのである。要するに進行は歸納的であるが、根源から見るときは、それは演繹的であることについて考へて見たのである。

さて思惟によつて自然界に關聯をあたへる、即ち感官を通じて自然界を吾々の精神界とに關聯をあたへることは、それは實驗し觀察する作用によつて、然かも教師の力をそれ程借らずして、所謂自力によつて實驗し觀察するときは認識はより可能なるものである。かく自身の力によつて學習して行く學習の様式の過程の中には實驗とか、發問とか、討議とか、發表整理とかが含まれてゐる。かくて完成したる思想の傳達とは考へずして、實驗と作業とによつて、作用し働きつゝある力を生活體驗せしめるものであると考へるのである。要するに理科は實驗と觀察と作業とによつて學習するところに理科の本質が作業に結合してゐるものである。

第二節 兒童科學としての學習

自然科學としての理科の學習に於ける思考活動は歸納的にして演繹的過程をとるべきものであることを述べて、これが學習活動は實驗と觀察と作業とによるを本道とするものであることを述べたのである。

かゝる理科の學習は發生的なる立場をとるものであつて、所謂科學の構成せられると同じ過程の立場である。かゝる立場こそ科學としての以前の科學の取扱ひであり、云はゞ兒童數學に對して兒童科學即兒童理科とでも云ふべき立場である。

從て學習せしめる方法としては創造的なる立場からの實驗實測作業と觀察とを本體として學習せしめるのである。直觀から歸納への態度をとり兒童の實生活の多くの經驗から得られた價值あるものを基礎として出立することである。彼の連續的なる實驗實測觀察記録、諸現象の圖表發表、實習作業等、これ等の事實に關する具體的なる事實現象から導き出して法則への構成的にと指導せられねばならぬのである。

以上述べた様な實驗と作業とは、兒童が一個の人格者として働くから、當然それは目的々活動で

あり、自由なる活動でもあることである自由なる活動は兒童自身の自由なる意志による計劃と、それを遂行するための實習作業をいふのである。そして教師の命ずるところに従つて働くところの活動ではなくて、自分からの活動で精神と關聯する活動であつて、所謂作業のことである。

第四十章 學習指導方向の再吟味

理科學習の教育的價值は科學的の陶冶價值であることは明瞭なることである。而して認識が行はれて知的な根本活動の發達が可能となるときは、それは形式的陶冶となるものである。その知的活動が事實的認識を確實に體得したとすればそれが實質的陶冶となるのである。

従つて只だ實質的陶冶や單なる形式的陶冶としては考へられないことは言ふまでもないことであるが、理科學習に於ては事實に立出する形式的方面の陶冶でなければならぬと思ふのである。要するに自然及び文化を取扱ふことからして内容教授に偏せずして實質に關聯する形式陶冶に力を置かねばならぬのである。

第四十一章 理科作業の指導着眼

理科學習に於ける作業的なる學習が指導せられるとき、認識の根本的活動が十分に活動せられることが必要である。然らば根本的なる活動とは何んな活動か、即ち、

第一には觀察法の指導訓練を必要とする。彼の全體と部分との關聯に於ける場合も主觀を交へてはならない。そして迷信とか偏見、先入觀念等をさけなければならぬのである。又豫想を働かしては微細なる點まで觀察することは難かしいのである。

第二には直觀を主とする認識のあらゆる領域からして、なるべく明瞭なる形態に於て働きつゝあるものがよい、そうしたありの儘の姿に於て直觀することが必要である。

第三には材料は純なる形態を示現してゐるものを選択することが必要である。かゝるものこそ兒童の價值意識の發達状態に適することとなり、兒童生活に合一するものであることになるのである。

第四には全人的なる態度に立つての眞理への探究であつて、眞の探究とは自力的なる自由の研究のことである。自由の研究の中には個人に對する指導の必要なることは云ふまでもないことである。

第五には研究作業の成案については、誤れるものあらば、それは訂正すること、その研究過程について査定してやる段階を踏むことが必要である。兒童の自力的にして創造的なる立場からの實驗作業學習には、その實際に至つては過程に於て、成案に於て誤れるものも構成することがあるからかうした手続きが必要である。

第六には手工及び圖畫の如きと關係を持たして行くことである。第一實驗用具から其の装置も兒童の手工的活動によつて出来るものは造らせること、第二にはその用具装置も各自に工夫せしめ方を創作せしめる等は必要なることである。又各自の研究したる處觀察したる部面は、その過程なり結果なりについて、なるべく、正確に繪畫として記載しておかしたり圖解しておかしたりすることは大切なることである。

第四十二章 實驗觀察作業の手續

目的を持つ價值的なる實驗觀察作業をなさしめる手續はどうなるか。理科の學習に於いて目的となる活動をなさしめるといふことになれば、必然的にその方法は自由なる活動の部面が多くなつて来る。然かもその作業の様式は實驗觀察作業といふことになる。かうした作業學習の實際手續について述べて見ようと思ふ。

第一節 研究題目の決定

先づ研究題目の決定をなさしめるのであるが、この決定にあつては、各自の自由とする場合もあり、教師から指示せられて自己の題目として決定する場合もある。

何れにしても研究の向き方の決定であるから、題材に關係のある既習事項を吟味したり、兒童の學習活動の動機を喚ぶことも其の前提としては必要なることであり、先づ實物、現象の概観をなさ

しめる、それから大體の目やすを立てさせてから、自己の見出したる問題、教師から與へられたる問題、協同に決定したる問題、何れにしてもかうした問題を各個人の研究問題とするか共同研究問題とするかである。

第二節 方法の計畫と材料の準備

方法の計畫とは、各自分々の研究共同の研究が決定したのであるから、方向も從て決定したので、その方法についての計畫をすることが必要になつて来る。動植礦物材料の如きは採集によること、學校備品によること、觀察方法を考へること飼育培養装置の計畫をすること、參考書を選定すること等が順序である。

研究の材料は動植礦物の如きは何れかといへば各自にて用意せられ易い。理化材料の如きは教師の準備によつてなければ困難なものである。

第三節 實際研究（研究指導書、個別指導）

いよく研究にとりかゝらせるに於ては、各自自由に研究するか共同によつて研究するかといふ

ことになる。この際は研究指導書が必要である。この研究指導書は教材について實驗觀察作業の方法について問題の形式でもつて考察工夫すべき點、注意すべき點を掲げる。かくて作業の方法と着眼についての指導をするのである。然かもこの指導書による時個人的なる指導も行はれるものである。

一體に實驗觀察の作業に於ては個人的なる指導をすることが必要である。この個人的なる指導といふことは、兒童がなしつゝある作業に干渉したり、或は教師の考へによつて引廻はすことではない。どこまでも兒童の自力的なる態度、創造的なる立場を尊重しての指導なのである。即ち相談相手となり。工夫を奨励したり、創作態度の稱揚をなす、成案への努力の稱讚をなす等が指導である。

第四節 結果の整理

かゝる研究の過程に於て又結果に於ては査定と訂正の必要なることも起るものである。即ち作業の結果乃至過程を記録したるノート、圖表、繪畫等について見る。最も理科作業に於て注意すべきは、ノート作製のための活動であつたり、その活動の成果であつたりすることは理科學習の目的と

は違ふからである。研究の活動を主としての記録が、目的とするところのノート作業であるからである。

又査定、訂正といふ前には作業の仕方はどうなつてゐるか、児童が十分理解してゐるか、應用のきく所謂形式陶冶が自ら成つてゐるか等を見なければならぬのである。それ故に児童の研究についての説明發表をさせたり、教材の主要點を問答したり、相互討論をさせたりすることもある。又教師が教師の教材觀を中心として、眞理を確證せしめたるために説明をしてやる場合もあるのである。

第四十三章 實驗觀察作業の過程

研究作業の手續きについては既に述べたが、そうした手續からいろいろの作業學習の様式として實際行はれることになるものである。その様式の代表的なるものを掲げることとする。

一 觀察的作業學習（多くは博物教材の場合）

基本的形式

- 1 直接體驗觀察に於ける着眼點の指導 (共同的)
- 2 採集飼育 (個別的共同的)
- 3 問題の構成 (個別的)
- 4 學級問題の構成 (共同的)
- 5 問題の解決 (個別的共同的)
- 6 觀察實驗の反省 (個別的)

應用的形式

- 1 自由研究 (個別的)
- 2 未解決事項の共同研究 (共同的)
- 3 觀察的實驗の反省 (個別的)

二 創造的作業學習 (多くは理化教材の場合)

基本的形式

- 1 經驗事項中より問題の構成 (個別的)
- 2 學級問題の構成 (問題に對する價值批判と研究順序の決定) (共同的)
- 3 問題の解決
 - 科學的想像の定立 (共同的個別的)
 - 實驗法の案出と實驗 (共同的個別的)
 - 實驗の反省 (個別的)

第四十四章 理科學習指導の實際

尋常科第四學年

教材 春分。

目的 太陽の運行を觀察せしめ、季節の變化生物と季節との關係を研究せしめ、渾沌たる自然界の中にも一大法則のあることを發見せしめ以て自然親愛と勞作の尊重とを計りたい。爲めに獨自在勞作研究を自發的に行はせたい。

準備 太陽、地球月の運行を示す器及び圖解。

過程

- 1 春の彼岸のお話生活、(聽く作業)
 - お寺詣り、お墓詣り、佛壇を祀る、讀經、(祖先祭祀) (亡友墓參をなす) お中日(春分) 春季皇靈祭。

ことは出来ない。

二、継続的な観察研究勞作の習慣を十分に涵養せなければならない。

三、種蒔き等の作業をも加へて見たい。

尋常科第五學年

教材 いね、いねの害虫、(長期に亘る作業)

目的 吾人の生活に直接最も深い関係をもつ稲の栽培法及びその害虫に関する研究を實際栽培上に就きて勞作的研究をなさしめ、同時に農業の大切なる生産作業なること及びこれに従事する農夫の勞作生活を理解せしめ以て尊い同情と敬意を拂ふ精神涵養迄計り指導したいのである。

過程

過程獨自研究として四月中旬頃課題する。

1 勞作研究事項

苗代の作り方、田の耕作、施肥、農家の様子、(農家の子弟を中心にしての相互研究)種子の選び方、まき方、發芽までの日數、各自に少量宛の種子を與へ、自らの試作により了得せし

む。(日誌の記載)

發芽に必要なもの、——溫度、水分

養分は種子中に在ることの研究

害虫驅除の作業、(苗代につき實際作業)

螟蟲その他の蛾、卵、幼蟲の生態、形態の研究、(採集せる實物に就きて)

蛾の産卵場所及び産み方

形態に就きては尋四蝶と比較研究の方法

田植の時期と氣候(梅雨)

田植の歌や詩の蒐集

田植の方法の觀察

耕作と灌水(稲の呼吸作用を考へる)

螟蟲、うんかの生活狀態

害する方法——被害統計

驅除法、——科學的方法

特に今度はうんかに就き細かく調べる

稲の花の研究

稲の收穫につきて

收穫方法、果實の科學的研究

雀の害、落穂拾ひの實際作業

食用以外の効用

然して農家農夫の勞作の苦心と米の出來不出來の及ぼす國家的影響等の補説に及ぶ。參考資料を充分に提供する。

2 研究發表

時々之を行ひ、研究録、作業日誌の整理を行ひ、自由的研究を確實に指導する。澤山な勞作も總べてそれは本統な目的々活動による勞作なることを自覺せしむ。勞作生産物の展覽鑑賞會を開く。

獨自の研究

相互の研究

教師と共同研究

農家の人達のお話による實際と自分の研究との比較。

備考

- 一、稻に關しては知既事項として随分あることと思ふ故に科學的な觀察方向に暗示し、且つ兒童の深究心を喚起せしめたい。
- 二、農業従事者の生活を本統に理解せしめ、一粒の米も、粒々辛苦とはこのことなりの了得をなさせたい。
- 三、國家の經濟、政治方面にも緊密な關係をもつものなることを特に考へさせたい。

尋常科第六學年

教材 熱、(熱の移り方熱と氣體の壓力を一緒に扱ふ)

目的 熱は極めて周知の理科的現象である。然し餘り生活に即し居る爲め何等の疑問も不思議も全く起さぬ處に本時の指導的可能性がある。即ち熱現象を生活中にその材料を求め且つ疑問不可解なる點を彼等の前に暗示し以て研究求知の自發活動を喚起せしめ彼等の獨自又は相互の勞作研究に訴へ極めて自然的な行き方に於て、熱現象の知識を開發指導せんとす。

學習過程

第一時

問題裁縫に使ふ鋸は鐵、ブリキ屋の鋸は同じ鋸でも銅で造つてあるが、何故違はせるだらう。
(實物を提示する)

研究、兒童の獨自及相互の研究を行はす。

結果、傳導、良導體の術語及び具體的實物を挙げ且つ各實驗會得せしむ。

第二時

問題、水は不良導體なるに何うして湯になるか。

研究、火で湯を沸かすに下の方は冷たいが上の方は熱い、お湯屋の風呂の體驗に訴へて研究方

向の暗示を與へる。

實驗、各分段にて行はしむ。

眞面目な勞作研究。

結果、對流作用の術語及びその理解。

第三時

前二時限の研究整理としての扱ひをなす。

問題、不良導體である空氣は如何にして暖かくなるか。

研究、教室や講堂や活動館等の上部にも下部にも小窓のあることを、あれは裝飾ではありませんせ
ん。と或るヒントを與へる。

研究發表、討論(前二時に於ける知識を基に盛んに推論研究する)。

實驗、空氣の膨脹すること。

氣體の對流實驗。

結果、膨脹、壓力の術語とその内容理解、氣體對流の事實の補説も問題的に提示し兒童教師共
働的な作業とす。

- 1 火事場に風の起ること。
- 2 竈や七厘の下部の小窓。
- 3 煙突の理。
- 4 冷蔵庫の構造と氷の位置。

第四時

問題、水蒸氣の壓力は如何にして實驗し得るか。

研究、鐵瓶の蓋、御飯が吹く、汽車が走る汽笛が鳴る。

機關運轉の實驗と説明。

瓦斯發動器の原理の推定。

作業、蒸氣機關運轉説圖の作製。

第五時

問題

- 1 電燈の下に居ても暖い。その熱は何うして来るか。
 - 2 高山は平地に比し太陽に近いが年中白雪戴くがこれも不思議ではないか。
 - 3 夏は白い着物を用ひ、冬は黒つぼいものを用ひるが、それは夏涼しく冬は暖かとする爲めだが何かこれを證明する實驗方法はあるまいか。工夫してごらん。
 - 4 夏の日中洋傘をさしても陽に焼けるそして熱いのは何故だらう。變なことだ。
 - 5 魔法瓶は何んなに拵へてあるのだらうか。
- 研究、前同様に獨自、相互共働の研究を開始し、發表論議する。

實驗の結果

輻射の現象、輻射熱の吸收放出、熱のエネルギー的扱ひ、及び實際事實等の展開となり了解體験を確實にする。

備考

總べて目的に向つて活動を開始し、自らの觀察、實驗の研究作業を看視することに深く留意したい。出來得べくんば兒童の自發的な問題を尊重して指導を進めたい。

等高科第一學年

教材 昆蟲類

目的 兒童生活の中の最も興味多く然して關係の非常に深い本教材は特に彼等の手を延し臚を大にして勞作研究により深く體驗了得を計らなければならぬ問題である。科學的に自明する一方には又自然親愛の尊い感情陶冶を考慮してなされなければならぬ極めて重要な教材である。

何處迄も兒童の自發的勞作研究を以て進ませ等自らの觀察である、自らの經驗であらしむる。本當な目的と活動に訴へなければならぬ。

準備

昆蟲標本、昆蟲類の蒐集、掛圖、蟲眼鏡、顯微鏡、動物分類表、昆蟲標本作製上必要なる用具一切、研究用紙、實驗圖用紙。

過程

- 一 準備作業、學習作業分團により材料其の他の準備をなす。
- 二 學習、研究作業。
- 三 發表整理、標本製法。

第一過程

- 1 昆蟲採集、(採集ノートに場所、日時、昆蟲の生活狀況等を記載し置く)
- 2 用具の仕度。
- 3 研究目的立案、(自分の特に研究せんとする方向を豫定立てる)

第二過程

- 1 採集ノートと實物とを發表し、同時に自己の疑問點として提供する。
- 2 研究過程を如何にするかの協議。
- 3 研究(獨自研究の持寄りによりて相互的共働の研究に進める)

(研究用紙記入、實驗圖作製)

- 4 問題に就きての共働研究を行ふ。
- 5 解決と教師の補説。

第三過程

- 1 第二次研究の未解決分の整理、及び其の他の質疑につき共働討論。
- 2 動物分類の科學的成案、(法則發見)
参考物使用及び教師の補説による。
- 3 昆蟲の科學的概念を事實より總合して一層明瞭ならしめる(自然界の讚美と法則)。
- 4 研究物の整理。
- 5 標本製作。

備考

- 一、標本鑑賞會を開きてその技術を練成する。
- 二、理科祭を行ひてその蟲靈を祀る。
- 三、採集は繼續的作業として實施し、常に標本製作及び實物觀察と實驗を行ふ様な或る趣味を養ふ。

- 四、自然親愛の念を自ら湧き立たしむ。
- 五、害蟲益蟲はかゝる間に自力發見をなさしむ。

高等科第二學年

教材 飲料水

目的

- 一 人類始め生物生存に缺くべからざるものたること。
- 二 水に含有するものゝ人體に及ぼす影響。
- 三 天然水中の含有物としてのガス、鹽類、有機物を調べること。
- 四 飲料水の良否の判定方法。
- 五 良好な飲料水を得る方法。

等の生活教材を彼等の勞作に訴へ知的な學習を計らんとするに在り。

學習過程

第一時

- 1 水と人生との關係。

- 2 水には如何なるものを含有するか。
- 3 含有物の人體に及ぼす影響。

第二時

- 4 飲料水として適當なる條件。
- 5 水質検査。
- 6 適當なる飲料水を得る方法。

以上は參考資料を充分蒐集展覽せしめて、独自の研究及び共働的研究により、その研究物の作製をなさしむる様な指導をもつて進めたい。

研究資料、(二例を掲ぐ)

- 人體中の水分六五% 主成分。
- 營養成分の消化、分解の媒介をなす。
- 汗、尿、唾液、涙、
- 血液の作用。
- 成人一日の必要量、二——三立位。

○ 飲食物中の水分量(百分率)

牛乳	八七	煉乳	二七
梅干	三七	砂糖	二
肉類	七三	鶏卵	七五
醬油	六七	野菜	九〇
パン	三三	穀類	一三

○ 雑用、洗濯、工場、入浴、掃除、散水其他、一人一日平均、一五〇立位。

○ 含有物検査。

物理的方法——色、臭、

化學的方法

試薬	反應	含有物
硝酸銀	白濁	鹽類
ネスレル試薬	黄赤色	アンモニヤ
蓚酸アンモニウム	白沈	石灰

濃硫酸を入れ	黒色	硝酸
後硫酸鐵		
鹽酸を加へ	白沈	硫酸
後バリウム鹽		

○ 水の種類

具體的實例を示す物。

○ 含有物の影響。

化學的方面の具體例

○ 飲料水として適當なる條件。

○ 良好なる飲料水を得る方法。

共に工夫考察せしむる爲めの作業化扱ひを執る。

備考

一、諸種の統計表製作(自己の研究に出發して)

二、簡易實驗装置の製作。

三、學校近傍の種々なる水に就きての實驗研究の發表をなさしむ。

實踐勞作教育
四、衛生方面との連絡につき諸施設の工夫考案を創造的に行はしむ。

實踐勞作教育 — 終 —

昭和八年三月十五日初版印刷
昭和八年三月三十日初版發行

實踐勞作教育

定價 金二圓四十錢



著者 山崎 博
發行者 吉田 幸太郎
印刷者 葛原 秀一
東京市京橋區入舟町三丁目三番地

發行所 東京市京橋區入舟町三丁目三番地 振替東京四九六七五番 教育實際社

發賣所 東京市京橋區入舟町三丁目三番地 振替東京一八五一三番 明治圖書株式會社

大賣所 東京市
林平書店
北隆堂
文東堂
東海堂
名古屋川瀨書文堂
久留米菊竹金文堂
佐賀大坪信堂
金澤宇都宮書店

大阪合資會社 柳原書店

【書育教の書圖治明】

教育教授 學校經營郷土 參考書

文學博士 野田義夫先生著 (菊判) 定價五、〇〇

勞作教育原論
奈良女高師 木下竹次先生著 (菊判) 定價各四、五〇

學校進動論 上下卷
東京帝大教授 入澤宗壽先生著 (菊判) 定價四、五〇

最近教育の思潮と實際
東京女高師 北澤種一先生著 (菊判) 定價四、五〇

現代作業教育の諸問題
ドクトル・オブ・大伴茂先生著 (菊判) 定價四、五〇

個性調査と教育指導
友納友次郎先生著 (菊判) 定價六、八〇

朝會畫會、講堂訓話、學校行新講話資料大成
東京女高師 山内俊次先生著 (菊判) 定價四、五〇

明治 圖書 解説書 (全七十九冊)

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第一

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第二

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第三

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第四

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第五

東京女高師訓導兼教諭 澁谷・市村兩先生著 定價二、五〇
小學常 新修身書解説 第六

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第一

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第二

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第三

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第四

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第五

靜岡縣靜岡師範主事 市村清次郎先生著 定價二、九〇
小學高 新修身書解説 第六

東京市京橋區入舟町一五八三 發兌 明治圖書株式會社

【書育教の書圖治明】

東京高等師範 相島・宮部兩先生著 (彙判) 定價四、五〇
 前訓導 國民記念日 **講堂訓話資料**
 東京高等師範 岸 一敏先生著 (四六判) 定價二、〇〇
 訓練と作 **各學年教育經營** 理論篇
 東京高等師範 岸 一敏先生著 (四六判) 定價三、八〇
 訓練と作 **各學年教育經營** 實際篇
 滋賀縣 栗下喜久治郎先生著 (四六判) 定價二、三〇
 鳥小學校訓導 **各學年教育經營** 實際篇
 主業 **作業學校の施設と經營**
 東京女子高 坂本 豊先生著 (四六判) 定價二、六〇
 等師範訓導 **學級經營の實際**
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、九〇
 文學博士 **指導 尋一、二學級經營の展開**
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、二〇
 文學博士 **指導 尋三、四學級經營の展開**
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、九〇
 文學博士 **指導 尋五、六學級經營の展開**
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、九〇
 文學博士 **指導 尋五、六學級經營の展開**
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、八〇
 小學 **乙種珠算書解說**
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **三學年新算術書解說**
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、九〇
 小學 **修正地理書解說** 尋五
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、九〇
 小學 **修正地理書解說** 尋六
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、八〇
 尋 **五年常新地理書挿画解說**
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、九〇
 小學 **修正地理附圖使用法**
 高橋・鈴木兩先生著 定價二、九〇
 小學 **修正地理書解說** 高一
 高橋・鈴木兩先生著 定價二、九〇
 小學 **修正地理書解說** 高二
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、六〇
 小學 **地理書挿画解說**
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、九〇
 小學 **地理附圖解說**
 高橋・鈴木兩先生著 定價二、三〇
 新 **變動地理教材解說** (尋常)

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發 三一五八一京東

【書育教の書圖治明】

東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、六〇
 文學博士 **指導 高一、二學級經營の展開**
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、二〇
 文學博士 **指導 理想的學級經營** (尋一)
 前教諭兼訓導 稻森 德島師範 安部 先生共著 各三、〇〇
 自然的生活時代 **理想的學級經營** (尋二)
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、九〇
 文學博士 **指導 模範的學級經營** (尋三)
 前教諭兼訓導 稻森 德島師範 安部 先生共著 各三、〇〇
 分化的生活時代 **模範的學級經營** (尋四)
 東京帝大教授 入澤宗壽先生監修 (四六判) 定價二、九〇
 文學博士 **指導 標準的學級經營** (尋五)
 前教諭兼訓導 稻森 德島師範 安部 先生共著 各三、〇〇
 內省的生活時代 **標準的學級經營** (尋六)
 東京高等師範 鹿兒島登左先生著 (四六判) 定價三、二〇
 範學校訓導 **學級經營の理想と實際**
 奈良女高師 鶴居滋一先生著 (四六判) 定價三、二〇
 訓導兼教諭 **各學年發展的學級經營の實際**
 德島師範前訓導 安部清見先生著 (四六判) 定價三、九〇
 德島女子職業學校長 **學級經營の根本義と實際**
 文部省實業補習 岡 篤郎先生著 (四六判) 定價二、四〇
 習教育主事 **學級經營と實習訓練**
 高橋・鈴木兩先生著 定價二、五〇
 新 **變動地理教材解說** 高等
 文部省地理調查前囑託 高橋 勝先生著 定價二、六〇
 地理 **外國地名解說**
 京都女子師範學校前主事 增澤 淑先生著 定價二、九〇
 小學 **國史** 尋五
 京都女子師範學校前主事 增澤 淑先生著 定價二、九〇
 小學 **國史挿画解說** (合本) (五六)
 京都女子師範學校前主事 增澤 淑先生著 定價二、九〇
 小學 **國史** 尋六
 京都女子師範學校前主事 增澤 淑先生著 定價二、九〇
 小學 **國史** 尋七
 京都女子師範學校前主事 增澤 淑先生著 定價二、九〇
 小學 **國史** 尋八
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **修正理科書解說** 尋四
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **修正理科書解說** 尋五
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **修正理科書解說** 尋六
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **修正理科書解說** 尋七
 東京府豊島師範主事 二階 源市先生著 定價二、九〇
 小學 **修正理科書解說** 尋八

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發 三一五八一京東

【書育教の書圖治明】

<p>福岡女師範 附屬小學校編纂 (四六判) 定價二、八〇</p> <p>小學校機能と經營の實際</p> <p>東京帝大教授 入澤宗壽先生著 (菊判) 定價四、〇〇</p> <p>新郷土教育原論</p> <p>和歌山師範 附屬小學校編纂 (四六判) 定價二、九〇</p> <p>新郷土教育の實際</p> <p>文部省實業補習教育 主事 岡 篤郎先生著 (菊判) 定價三、五〇</p> <p>實業補習郷土調査の理論と實際</p> <p>滋賀縣 島小學校編纂 (四六判) 定價二、六〇</p> <p>體驗と信 念に基く郷土教育の學習と實踐</p> <p>滋賀縣 島小學校編纂 (四六判) 定價二、六〇</p> <p>郷土の調査及研究 各教科郷土化の實際</p> <p>修身參考書</p> <p>奈良女子高等師範學校訓導 岩瀬六郎先生著 (菊判) 定價四、五〇</p> <p>生活修身原論</p>	<p>東京府豊島師範主事 二階源市先生著 定價二、九〇</p> <p>高等理科書解説 高二</p> <p>廣島高等師範訓導 大竹拙三先生著 定價三、三〇</p> <p>日本美術史 國定小學美術教材解説</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價三、九〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第一</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、八〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第二</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、八〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第三</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、八〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第四</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、八〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第五</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、八〇</p> <p>小學常 圖書の解説と其取扱 第六</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第一</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第二</p> <p>東京高師訓導兼教諭 三苦・山田先生共著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第三</p>
---	---

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發 三一五八一京東督振

【書育教の書圖治明】

<p>東京女高師 澁谷義夫先生著 (菊判) 定價五、五〇</p> <p>現代の修身教育</p> <p>東京高等師範 荻原 擴先生著 (四六判) 定價三、〇〇</p> <p>生活の倫理</p> <p>東京女高師 澁谷義夫先生著 (四六判) 定價二、六〇</p> <p>修身德育教授の系統案</p> <p>東京高師 佐々木秀一先生著 修身の部 定價三、五〇</p> <p>修身訓練の諸問題</p> <p>東京府 附屬小學校編纂 (四六判) 定價三、五〇</p> <p>修身書の縦の研究</p> <p>徳島師範 前訓導 安部清見先生著 (四六判) 定價三、〇〇</p> <p>道徳生 活指導 修身教育の原理と實際</p> <p>廣島高等師範教授 西 晋一郎・磯野 清先生共著 (菊判) 定價四、三〇</p> <p>代表國民道德書彙編 上</p> <p>東北帝國大學教授 廣清嘉雄先生編著 (菊判) 定價各六、八〇</p> <p>小學補習 公民教育資料大成 下上卷</p>	<p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>訂新 小學常 唱歌の解説と其取扱 第一</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>訂新 小學常 唱歌の解説と其取扱 第二</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>訂新 小學常 唱歌の解説と其取扱 第三</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>訂新 小學常 唱歌の解説と其取扱 第四</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>訂新 小學常 唱歌の解説と其取扱 第五</p> <p>文部省工業教育囑託 西川 裕先生著 定價三、〇〇</p> <p>要目進捗 工業大意解説</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>要目進捗 手工教材解説 高二</p> <p>東京高師訓導兼教諭 井上 武士先生著 定價二、九〇</p> <p>要目進捗 手工教材解説 高一</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第六</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第五</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第四</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第三</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第二</p> <p>東京高等師範前訓導 山田 義郎先生著 定價二、九〇</p> <p>小學常 手工教材解説 第一</p>
--	--

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發 三一五八一京東督振

【書育教の書圖治明】

廣島高等師範學校教授 長倉橋介先生著 (四六判) 定價二、六〇
公民教育と實生活
 廣島高等師範學校訓導 堀之内恒夫先生著 (菊判) 定價三、五〇
公民教育と修身教育
國語參考書
 友納友次郎先生著 (菊判) 定價四、八〇
讀方教育原論
 東京高等師範學校訓導 田中豊太郎先生著 (菊判) 定價四、五〇
讀方教育の理論と實際
 東京高等師範學校訓導 宮川菊芳先生著 (菊判) 定價四、八〇
讀方教育の新潮と實際
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 (菊判) 定價四、五〇
發展的讀方の學習
 文部省圖書監 井上 越先生著 (菊判) 定價五、五〇
 修官 文學士 紀行 **祖國を出てて**

東京高等師範學校訓導 井上 武士先生著 定價二、九〇
 新編 小學 **唱歌の解説と其取扱** 尋六
 奈良女子高等師範學校訓導 川口 英明先生監修 定價二、八〇
 各學年 **學校體操新要目解説**
明治圖書の指導案 (全十三冊)
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋一
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋二
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋三
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋四
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋五
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、八〇
 小學 **修身學習指導案** 尋六
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價二、九〇
 高小 **正修身學習指導案** 高一
 德島女子職業學校校長 安部 清見先生著 定價三、二〇
 高小 **正修身學習指導案** 高二

【書育教の書圖治明】

東京高等師範學校訓導 宮川菊芳先生著 (四六判) 定價二、六〇
社會生活人への讀方教育
 東京高等師範學校訓導 佐藤末吉先生著 (四六判) 定價三、〇〇
成長の讀方指導の過程
 東京高等師範學校訓導 佐藤末吉先生著 (四六判) 定價二、九〇
低學年の讀方指導
 東京高等師範學校訓導 佐藤末吉先生著 (四六判) 定價三、〇〇
中學年の讀方指導
 友納友次郎先生著 (菊判) 定價五、〇〇
國語教育の標準語法
 友納友次郎先生著 (四六判) 定價三、五〇
私の讀本教育
 文學士 今泉浦治郎先生著 (四六判) 定價三、五〇
作業型讀方教授の新研究
 文學士 今泉浦治郎先生著 (四六判) 定價二、九〇
國語教育の礎石 言語の本質及機能

奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋一
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋二
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋三
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋四
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋五
 奈良女子高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生著 定價二、八〇
 小學 **讀方學習指導案** 尋六
 東京高等師範學校訓導 黑沼勇太郎先生著 定價二、〇〇
最新綴方指導案 尋二
 東京高等師範學校訓導 黑沼勇太郎先生著 定價二、〇〇
最新綴方指導案 尋三
 東京高等師範學校訓導 黑沼勇太郎先生著 定價二、〇〇
最新綴方指導案 尋四
 東京高等師範學校訓導 黑沼勇太郎先生著 定價二、〇〇
最新綴方指導案 尋五
 東京高等師範學校訓導 黑沼勇太郎先生著 定價二、〇〇
最新綴方指導案 尋六

【書育教の書圖治明】

<p>東京府豊島師範 二階・鷺山兩先生著 (菊判) 定價四、六〇 學校教諭兼主事 新理科教室の設備と經營</p>	<p>東京女子高等 吉田 弘先生著 (四六判) 定價二、六〇 師範學校訓導 修正理科書の取扱</p>	<p>廣島高等師範學 關原吉雄先生著 (四六判) 定價二、九〇 校訓導兼教諭 私の理科教育</p>	<p>奈良女子高等師範 大浦茂樹先生著 (菊判) 定價四、五〇 學校訓導兼助教諭 學習園の經營と活用</p>	<p>東京府 附屬小學校編纂 (四六判) 定價三、三〇 豊島師範學校 我が校の理科教育</p>	<p>廣島高等師範學 關原吉雄先生著 (菊判) 定價三、八〇 校訓導兼教諭 理科發表訓練の原理及方法</p>	<p>女子學習院 上甲二郎先生著 (四六判) 定價二、九〇 教 圖畫・手工參考書</p>	<p>女子學習院 上甲二郎先生著 (四六判) 定價二、九〇 教 の圖案の新指導</p>
<p>東京女子高等師範訓導 岩下 吉衛先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各五、〇〇 主業 趣味の課外讀本</p>
<p>東京高等師範教授 互理章三郎先生著 定價各五、〇〇 主業 實業補習・英語教科書</p>	<p>東京府豊島師範教諭 大杉謹一先生著 定價五、〇〇 主業 修身公民教科書</p>	<p>文部省實業補習教育主事 岡 篤郎先生著 定價各五、〇〇 主業 女子公民訓</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>
<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>
<p>慶應義塾大學教授 平出 恒一先生著 定價各四、五〇 新主業 數學教科書</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發

【書育教の書圖治明】

<p>東京高等師範學 三苦正雄先生著 (四六判) 定價二、九〇 校訓導兼教諭 に於ける鑑賞指導の理論と實際</p>	<p>女子學習院 黒田・上甲先生共著 (四六判) 定價各二、九〇 教 クレイヨンの新指導</p>	<p>女子學習院 黒田・上甲先生共著 (四六判) 定價二、九〇 教 水彩畫の新指導</p>	<p>奈良女子高等 會根 榮先生著 (四六判) 定價二、九〇 師範學校訓導 クロツキーによる圖書の革新</p>	<p>奈良女子高等師範 横井曹一先生著 (四六判) 定價各一、三〇 學校訓導兼教諭 私の圖畫教育指導</p>	<p>奈良女子高等師範 横井曹一先生著 (四六判) 定價二、九〇 學校訓導兼教諭 主としたる圖畫學習指導の實際</p>	<p>東京高等師範學 三苦正雄先生著 (菊判) 定價各五、五〇 校訓導兼教諭 新時代の手工・工業集成</p>	<p>奈良女子高等師範 横井曹一先生著 (四六判) 定價各一、三〇 校訓導兼教諭 私の手工教育指導</p>
<p>東京女子高等師範訓導 岩下 吉衛先生著 定價各五、〇〇 主業 兒童算術問題集</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價三、五〇 訂修 趣味の補習讀本</p>
<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>
<p>慶應義塾大學教授 平出 恒一先生著 定價各四、五〇 新主業 數學教科書</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>	<p>東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生著 定價各三、五〇 訂修 趣味の現代文讀本</p>

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 兌發

【書育教の書圖治明】

神奈川女子師範前教諭 山崎 博先生著 定價二、四〇 田島體験學校校長 新時代の郷土教育	神奈川女子師範前教諭 山崎 博先生著 定價二、八〇 田島體験學校校長 郷土教育の再吟味	神奈川縣 田島體験學校編纂 (四六判) 定價二、八〇 郷土教育の低學年經營	東京女子高等師範學校主事 北澤種一先生監修 (四六判) 定價二、八〇 生活發展 學級學校經營の實際	文學博士 入澤・伊佐田兩先生著 (四六判) 定價二、二〇 文化科教育と郷土教育	徳島師範學校前調導 安部 清見先生著 (四六判) 定價三、〇〇 徳島女子職業學校校長 郷土を中心とした 行事教育の實際	茨城縣 第二附屬常磐小學校編 (四六判) 定價二、五〇 郷土教育の再檢討實際的研究	東京成 野瀬寛顯・根岸 豊先生共著 (四六判) 定價三、〇〇 小學校に於ける 學藝會と展覽會の經營			
野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價六〇 國史教授案 尋六	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價六〇 理科教授案 尋四	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價六〇 理科教授案 尋五	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價六〇 理科教授案 尋六	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價二、四〇 理科教授案 尋一	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價二、四〇 理科教授案 尋二	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價三、〇〇 理科教授案 尋三	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價四、二〇 理科教授案 尋四	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價四、二〇 理科教授案 尋五	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價四、二〇 理科教授案 尋六	野澤・山田・稻森・渡邊四高師先生共著 定價四、二〇 理科教授案 尋六

社會式株書圖治明 町舟入區橋京市京東 町三一五八一京東警振 兌發

253
636